

福音メッセージ集

仮の住まいと 永遠の住まい

重田定義



仮の住まいと
永遠の住まい

重田定義

序にかえて

このたび、五年前に出版いたしました、わかりやすい福音メッセージ集「仮の住まいと永遠の住まい」について、出版社との契約が終了しましたので、より求めやすい価格で多くの方に読んでいただきたいと思い、ここに改めて発行させていただきます。

私のような聖書の知識にも乏しく、信仰も未熟な一信徒が、このような福音メッセージ集を出版するようになったのは、ただ、ただ、御霊なる主イエス様のお導き以外のなにものでもないことを深く覚えます。

主イエス様は私のような者もあわれんでくださり、愛してくださって、十字架の贖いのみわざによって罪から救い出してくださいましたばかりか、その後もなお私のかたくなな自我を砕いて主に従うようにと、日々聖書のみことばを通して、また生活を通して忍耐をもつて訓練し、導いてくださっていることを体験的に覚え、心から主に感謝いたします。この福音メッセージ集に収めた十のメッセージはいずれも、そのような私自身の体験を通して

主が示してくださった大いなるみこころを、私の家での家庭集会や各地のキリスト集会で取り次がせていただいたものであります。十番目の「神から受ける慰め……父の友人の手紙から……」は、いざさか私事に属することですが、私の家族の上に現わされた主イエス様の大きなあわれみを通して、主がいかに愛と慰めに満ちた方であるかを知っていただきたいと願って、あえて掲載させていただきました。

どうか、この本をお読みになったお一人おひとりが、この本を通して神様の愛と恵みの結晶であるイエス・キリストの救いのみわざをご自分のものとしてお受け入れになっただけですように、また、すでにイエス・キリストを信じておられる方も、この本を通して救いの確信を強められ、神の子ども、また主のしもべとして、ますます主に従うよろこびと平安と希望に満ちた日々を歩んでいただけますよう、心からお祈りいたします。

主がこの本を用いてくださり、この本を通して主のご栄光のみがますますはめたたえられますように心から祈りつつ、序にかえさせていただきます。

最後に主にあつて表紙のデザイン制作の労をとってくださいましたテキスタイル・デザイナー藤村倫子姉妹に心から感謝いたします。

二〇〇一年七月

重田定義

目次

一	仮の住まいと永遠の住まい	1
二	ストレスからの解放	17
三	自分の目を正しく数える	32
四	宗教の神と聖書の神	48
五	神の奥義としての処女降誕	72
六	ふたりはイエスとともにいた	89
七	信仰における正しい熱心、間違った熱心	106
八	「わたしもあなたがたを遣わします」	128
九	信仰の確信	144
十	神から受ける慰め——父の友人の手紙から——	164

目次

あとがき

一 仮の住まいと永遠の住まい

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいきます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためです。私たちがこのことかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。

(コリント人への手紙第二五章1〜5節)

今日は、ごいっしょに、このみことばの中から、「地上の幕屋」と「天にある永遠の家」ということを中心に考えてみたいと思います。冒頭のみことばの最初のところを平たく言いかえてみますと、「この世で生きている私たち人間のからだは、天幕のように破れやすく、それは一時的な仮の住まいに過ぎないが、キリスト者には人の手で造られた家ではなく、神様からいただく建物が天に用意されている。それは一時的な壊れやすい建物ではなく、永遠の建物である。」ということでもあります。

地上の天幕にたとえられる人間のからだ

私たちはどんなに長生きしても、いずれは死ななければなりません。人間は昔から死を恐れていました。医学の進歩発達は、不老不死という人間の切なる望みに応えるために行なわれて来ました。しかし、いかに医学や医学技術が進歩しても、たしかにそれによって多くの病気が治るようになり、また人間の寿命は延びましたが、依然として死は存在しており、人間はいったん生まれれば必ず死ななければなりません。しよせん不老不死は人間のはかない夢に過ぎず、人間はひとり残らず、生まれた瞬間から死に向かって歩み始めるということは、だれでも認めざるを得ないのです。

パウロは天幕作りをなりわいとしていました。天幕を作って生計を立てながらイエス様の福音を宣べ伝えていたのです。彼は、自分で天幕を作っていたので天幕のことはよく知っていました。たとえどんな丈夫な布地で、どんなにしっかき縫い合わせでも、風雨や日光や空気にさらされているうちに、やがてぼろぼろに破れてしまうのです。そのような天幕を見て、パウロは聖書に書かれてある人間の霊と肉体を考え合わせ、肉体も天幕のような、はかないものであることを知ったのです。

神様は、人間をお造りになったときに、からだと霊とは別々に造られました。

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。

そこで、人は、生きものとなった。

(創世記2章7節)

ちりはもとあつた地に帰り、霊はこれを下さつた神に帰る。

(伝道者の書12章7節)

神様は、まず土地のちり、すなわち無機物、有機物からなる物質によって人間のからだをお造りになり、その後でいのちの息、すなわち霊をそのからだに吹き込まれ、それによって人間が生きたものとなったとあります。ですから、人間の肉体は、霊の住まいであると

言うこともできません。そして、物質で構成されているからだは、やがて時が来れば、霊と分離して、もとあった土に帰らなければならぬ、これが死なのです。私たち人間は例外なくこのようにして生まれ、死んで行くのであり、パウロはこの肉体を天幕にたとえて、地上における一時的な「仮の住まい」と言っているのです。医者には、病気を治療したり予防したりしますが、それは結局、天幕のほころびを見つけて直したり、天幕を長持ちさせるための工夫をしたりするような仕事と同じようなものであります。

しかし、私たちの肉体が、はじめからそのような不完全なものであったかと言いますと、そうではないのです。神様は完全な方です。したがって、その神様によって造られた被造物はすべて完全であります。神様は、植物、動物をそれぞれの種類に従ってお造りになり、それをご覧になってよしとされ、すべてのものをお造りになったときに、改めてそれらをご覧になって満足された、と創世記にあります。

そのようにして神はお造りになったすべてのもををご覧になった。見よ。それは非常によかった。

(創世記一章31節)

ですから、人間も造られたときは完全でありました。完全であれば死もありません。し

かし、そのように神様が満足されるように完全に造られた被造物の中で、人間だけが完全なものから不完全なものに変わってしまったのです。なぜでしょうか。それは、神様によって造られた最初の人アダムとエバがサタンの誘惑に乗って、神様の「この木の実を食べてはいけない。食べると死ぬから」という戒めに背いて、「まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった」ので、自分の欲望を満たすために食べてしまったからであります。そのことによって神様は報いとして、約束通り死を与えられたのであります。したがって、アダムの子孫である私たち人間も、生まれながらにアダムと同様に神様のみこころに従わずに、自分の欲望に従うようになってしまったのであり、すべての人間は死ななければならなくなったのであります。パウロはこれについて、次のように言っています。

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、—— それというのも全人類が罪を犯したからです。

(ローマ人への手紙5章12節)

肉体の死と第二の死

私たちは普通、死とはこの世に生まれたいのちが終わること、医学的に言えば、私たちの呼吸や心臓や脳などの活動が永遠に停止することであると理解しています。すなわち、私たちは、からだの死が死であると考えます。しかし、聖書では死はからだの死だけで済むのではなく、からだの死の後でやがて来る神様のさばきの日に、神様に背いた人の霊が滅びの刑の宣告を受けて、永遠に苦しまなければならないとあり、これを「第二の死」と言っています。ヨハネは、神のさばきのときの有様を黙示録の中で次のように言っています。

私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに應じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに應じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死であ

る。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

(ヨハネの黙示録20章12〜15節)

実は、肉体の死よりも、この第二の死のほうがはるかに恐ろしいのです。この死は、生前にどれほど善いことをしても、人格がすぐれていても、学問があっても、権力があっても免れることはできません。このみことばにある「いのちの書」に名の記されている者だけが免れることができます。では、いのちの書とは何でしょうか。それは永遠の神の御国に入る人々の名が記されている天の書物であります。イエス様の尊い血によって、神様に犯した自分の罪が聖められたことを、心から信じた人々の名が記された書物なのです。

天に備えられている朽ちないからだ

冒頭のみことばのように、地上の幕屋にたとえられた人間の肉体は、死とともに朽ち果てますが、イエス様を信じた者には、神様が天に用意してくださる永遠の家があります。この家は、イエス様を信じることによって聖められた者の霊が入るために、神様が造ってくださいました聖い、朽ちない、からだであります。この天に属するからだは、イエス様を信じる者にのみ与えられます。それは、イエス様がご自分を信じる者に与えられた約束であ

ります。

だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。

(ヨハネの福音書3章13〜15節)

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

(ヨハネの福音書11章25節)

この約束によって、私たちイエス様を信じる者は、地上のからだは死んでも、霊は神様が天に備えてくださった朽ちないからだを着ることができるようです。イエス様を信じないこの世の人は、昔からこれを馬鹿げた話であると嘲笑して来しました。しかしパウロはこれについて次のように言っています。

私があなたがたに最もたいせつなことで伝えたのは、私も受けたことであつて、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従つて三日目によみがえられたこと、

また、ケバに現われ、それから十二弟子に現われたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。

(コリント人への手紙第一15章3〜6節)

もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。

(コリント人への手紙第一15章17〜21節)

イエス・キリストの復活は、神の御子イエス様がなされた多くの奇跡の中でもっとも重大なものの一つであります。人間には不可能な、死からのよみがえりは、罪が赦された人間に永遠のいのちを授けるために、イエス様が成し遂げてくださった神様の恵みのみわざであります。そのみわざは一回で完全であり、したがって二度とふたたびイエス様が復活

される必要はありません。そして神様は、さらにイエス様の復活がたしかな事実であることを証明されるために、十二弟子をはじめ、イエス様を信じる五百人以上の人々に復活されたイエス様を現わしてください、彼らを復活の証人とされたのであります。その結果、彼らは自分の目で見た事実を、自分のいのちを賭して、殺されるまで証しし続けました。そのひとりペテロは、次のように証言しています。

私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行なわれたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現われさせてくださいました。しかし、それはすべての人々にはなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちにです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられて後、ごいっしょに食事をしました。

(使徒の働き10章39〜41節)

このような神様の深いご配慮にもかかわらず、なおイエス様の復活を信じられない人は、人間の限られた経験や知識だけでは判断の物差しにできない、あわれな存在であると言わざるを得ません。

私たちが造ってくださった神様は、このように、ご自分に背いた私たちをなお愛してく

ださり、ご自分との永遠の交わりを回復させようとお考えになって、御子イエス様の十字架と復活のみわざによって、これが自分に対する神様のあわれみであると信じる者に、罪の赦しと永遠のいのちを与えられ、天国に住む家、すなわち朽ちない、聖いからだを用意してくださっているであります。

イエス様を信じる私たちは、この希望があるからこそ、この世の患難があっても勇気をもって耐え忍ぶことができます。パウロは次のように言っています。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

(ローマ人への手紙8章18節)

「キリスト者のいのちの宣誓」

私は東海大学医学部で「医の倫理委員会」の委員長を務めておりましたので、役目柄いろいろな内外の医の倫理や生命倫理に関する文献を調べましたが、その中に「キリスト者のいのちの宣誓」というアメリカの資料がありました。最近、末期医療あるいは終末医療ということが問題になっております。末期医療とは、病気の末期に行なわれる、主として

心臓機能や呼吸機能の管理を目的とする医療のことを言いますが、なぜこれが問題になっているかと言えば、人工呼吸機の発達によって、人為的に強力で死を延ばすことが可能になったからです。死を待つだけの状態に置かれている病人のいのちを、ただ無理やりに延ばすことが、果たしてその人のいのちの尊厳性を尊重していると言えるのだろうかという、いわゆる尊厳死の問題であります。この問題に対するキリスト者の一つの答えが「キリスト者のいのちの宣誓」に表わされていると思われましたので、その内容をご紹介します。

「私は、イエス・キリストが私のためにこの世に生まれてくださり、苦しみを受け、そして死んでくださったことを信じます。また、イエス・キリストの苦しみと死と復活は、私が今、迎えようとしている死から復活への道をあらかじめ示し、かつ、そのことを可能にしてくださいることを信じます。私は、キリスト者のいのちは、死によって奪い去られるものではなく、ただ住まいが変わるだけだと信じます。したがって、もし恐れや悲しみが私の心の中に起こっても、聖霊の恵み、助けによって、私はこのからだを明け渡し、永遠に神とイエス・キリストと結び合うことができるものとして、この死を受け止めたいと思えます。」

こういう意味の内容であります。私たちキリスト者の死に対する考えと、天国の住まい

に對する希望の確信を良く言い表わしていると思ひます。今日、いろいろな形式の「リヴィング・ウイル」、すなわち、「自分の死に方について自分の意志を明らかに表示した書」が發表されています。一般的には、自分は安らかに死を迎えたいから、死に臨んで、いたずらな延命のための措置は行なわないで欲しい、という内容であります。病氣になつたときに、これを医者に提示すれば、医者は本人の意志を尊重して、死に際して、いたずらな延命のための治療は行なわないということになります。しかし、なぜ安らかに死を迎えたかについては、いづれの形式の「リヴィング・ウイル」でも明白ではありません。唯一つ、「キリスト者のいのちの宣誓」には、その理由が明らかに示されているのです。すなわち、私たちキリスト者のいのちは、肉体の死で終わるものではなく、その後、神の約束された天国に住まいを移して永遠に続くものであるということでもあります。

人間が死に際して取るべき選択肢は二つのみ

人間が死に際して取るべき選択肢は二つしかありません。一つは絶望であり、もう一つは希望であります。この世がすべてである、あるいは死は終わりであると思つてゐる人にとっては、死は絶望であります。そして、それは正しい考へであります。なぜならば、さ

きほどから申しておりますように、肉体の死の後に待っているのは永遠の滅びであるからです。けれども、キリスト者にとっては希望であります。それは、天に備えられた永遠に滅びることのない、聖いからだが与えられるからであります。パウロは、イエス様を信じる私たちに、永遠に滅びることのない、からだが与えられる時期について、神の奥義として次のように言っています。

聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに来るのです。第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ているのです。私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが

鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

(コリント人への手紙第一15章45〜55節)

「朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬ……。」とはどういうことでしょうか。それは、朽ち果てるしかない罪人が、自分の罪の贖いのために十字架上で身代わりの死を遂げてくださり、三日後に死からよみがえってくださったイエス様を信じる、ということにはほかなりません。

また、「終わりのラッパの鳴るとき」とは、イエス様が信じる者に聖い、朽ちない、天に属するからだを与えるために来てくださるご再臨のときであります。このように大きな希望が約束されていますから、キリスト者にとっては、「いのちが死にのまれる」のではなく、「死がいのちにのまれる」のであります。すなわち、死がいのちよりも強いのではなく、いのちが死よりも強いのであります。それは、イエス様を信じる者の中に、イエス

様のよみがえりの力がすでに与えられているからです。

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

(ピリピ人への手紙3章21節)

ですから、私たちキリスト者も、パウロと同じように、「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。」と、死に対して勝利の声を高く上げることができるのです。

ほんとうの幸せは、死んでしまえばなくなるような一時的なものではなく、永遠に続くものでなくてはなりません。そのような幸せは、決して人間の力で得られるものではなく、神様からの恵みとして与えられるものであり、それは死んでも死なない、永遠のいのちであり、神様が備えてくださっている、朽ちない聖いからだを着ることでありましょう。そのため私たち人間ができることは、唯一つ、神様の前に自分のわがままを、はっきり認めて心から悔い改め、神のあわれみと愛の御手であるイエス様にすがることだけなのです。

二 ストレスからの解放

二 ストレスからの解放

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

(ヨハネの福音書14章27節)

今日はストレスからの解放について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

ストレスとは

ストレスとは元来ラテン語でアクセントを強調する、高めるという意味でした。これが十七世紀に物理学に取り入れられて、物体に加えられた外部からの圧力をストレスという

ようになりました。ストレスによって、物体は自分の弾力性によって緊張し、歪み、変形します。この現象が生体にも起こることを、生理学的に説明したのがハンス・セリエです。

セリエは動物に寒さや恐怖を与えると、延髄と大脳皮質の間において体の感覚と自律性を維持する機能を持つ間脳から、脳下垂体に刺激が伝わり、そこから分泌された下垂体ホルモンが副腎を刺激して、ステロイドおよびアドレナリンの分泌を増加させることを証明しました。このアドレナリンは交感神経を興奮させる作用があるので、それによって血管が収縮して顔色が青くなり、血圧が上がり、心臓の動悸が早くなり、筋肉が緊張してふるえが起こります。これがストレスによって起こる生体の緊張症状です。

また、眠れなくなったり、いらいらしたり、そわそわしたり、落ち込んだりするというような精神症状も、ストレスによって起こります。

しかし、ストレスによって起こるこのような生体の反応は、だれにでも同じように起こるとは言えません。ストレスに対する感受性の個人差によって、反応の大きさも異なります。

ストレスが関与する病気

二 ストレスからの解放

健康を損なったり、病気になるったりする背景には、ストレスが関与していることが多いこともわかっています。たとえば、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、狭心症、心筋梗塞、本態性高血圧、気管支喘息、甲状腺機能亢進、関節リウマチ、円形脱毛症、原発性緑内障、過敏性腸症候群、アルコール依存、薬物依存、ノイローゼなど、多くの病気は、いずれもストレスによる精神的あるいは神経的緊張が、発病あるいは病気の経過に大きく関わっていることがわかっています。

ストレスの原因

では、ストレスを引き起こす原因にはどのようなものがあるのでしょうか。大きく二つに分けますと、一つは人間関係の消失や破綻はたんであり、たとえば配偶者や信頼していた人の死、離婚、家族とのトラブル、職場でのトラブルなどが挙げられます。二つ目は生活や環境の激変であり、たとえば単身赴任、転職、転勤、職場の配置転換、失業、入学、就職、倒産、多額の負債などが挙げられます。

これらを別の言葉で言えば、今まで信頼していたものや依存していたものを失ったり、疎外されたりした体験、あるいはこれまでに身につけてきた知識や経験や力では対処でき

なくなった体験などが、ストレスの原因となるということです。その結果、これからはひとりで自分を守り、戦わなければならぬところから起こる不安、恐怖、緊張が、前に述べたようなさまざまな病気や症状を引き起こしたり、悪化させたりするのです。

したがって、ストレスからの解放は、言いかえればストレスによって生じる不安、恐怖、緊張からの解放であり、そのために、今日では精神安定剤などの薬物療法、自律訓練法、運動・体操療法などのいろいろな方法が考えられ、用いられています。

神の力が、たましいに働くことによるストレスからの解放

けれども、今申しましたストレス解決の方法は、すべて人の知恵や知識によって心身に働きかける方法ですから、それぞれに限界があり、完全なものはありません。しかし、これとはまったく異なる、しかも完全なストレス解決の方法があります。それは神様の力によって、たましい、霊に作用するストレス解決法であります。

聖書からダビデの例を見てみたいと思います。ダビデは敵ばかりでなく、自分の親友からも追われるという目に会ったとき、たいへんな不安と恐怖に襲われました。彼はそのときの心の状態を次のように言い表わしています。

二 ストレスからの解放

私の心は、うちにもだえ、死の恐怖が、私を襲っています。恐れとおののきが私に臨み、戦慄が私を包みました。

(詩篇55篇4〜5節)

まことに、私をそしめる者が敵ではありません。それなら私は忍べたでしょう。私に向かつて高ぶる者が私を憎む者ではありません。それなら私は、彼から身を隠したでしょう。そうではなくて、おまえが。私の同輩、私の友、私の親友のおまえが。

(詩篇55篇12〜13節)

このように、ダビデは信頼していた味方、それも親友からのちを狙われるという、たいへんなストレスを受け、その結果恐れおののき、彼の表現によれば戦慄が身を包むという思いを味わったのです。しかし、そのときダビデは自分の力で戦ったでしょうか。そうでなく、彼は次のように、主なる神様に助けを求め、神様に自分の身をゆだねました。

私が、神に呼ばわると、主は私を救ってください。夕、朝、真昼、私は嘆き、うめく。すると、主は私の声を聞いてくださる。主は、私のたましいを、敵の挑戦から、平和のうちに贖い出してくださる。

(詩篇55篇16〜18節)

そして彼は自分自身の体験から、次のように私たちに勧めています。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさない。

(詩篇55篇22節)

神に信頼する者を、神は守られる

どうしてダビデはこのように言い切ることができたのでしょうか。それは、彼が神様を自分の主と信じ、その主なる神様に全き信頼を置いていたからであります。彼は自分の体験から、主なる神様は真実な方であり、抛り頼む者を決して見捨てることなく、苦しみ、恐れ、悩みから救ってくださると確信していたからなのです。

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。

二 ストレスからの解放

神様は、ご自分に信頼したダビデに応えられ、彼を守り、彼のたましい、霊に平安を与えられました。その結果、彼から不安や恐怖は消え失せました。

(詩篇62篇5〜8節)

神の人格を信頼すること

しかし、神様に信頼するということは、いったいどういうことでしょうか。私たちはある人に信頼するときには、その人の何に信頼するのでありましょうか。その人の社会的地位にでしょうか。財産にでありましょうか。権力にでありましょうか。知識にでありましょうか。私たちが、ある人に心から信頼するのは、そのようなものではなく、その人の誠実さ、真実さなど、すなわちその人の人格に信頼するのではないのでしょうか。

しかし、神様は私たちの目には見え、触れることもできず、人間の五感では存在を確かめることのできない方です。ですから人は、目に見えない神様が、人格を持っておられるかどうかなどということを考えようともしません。まして、そのような神様に信頼するなどというのは愚かしいことと人が思うのは当然かも知れません。たしかに神様は私たちの目には見えません。けれども、私たちは、神様が、私たちひとりひとりに何をしてくだ

さったかを知ることによって、神様の人格を知ることができるのです。

神様が私たちに何をしてくださったかは、聖書にはっきりと書かれています。次にその箇所をいくつか挙げてみましょう。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネの福音書3章16節)

いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

(ヨハネの福音書1章18節)

神様は、私たち人間ひとりひとりを、罪による滅びから救い出して、永遠のいのちを与えるために、神の御子をこの世界に遣わしてくださいました。

イエス・キリストの人格を信頼すること

その神のひとり子のイエス・キリストは次のようにおっしゃいました。

わたしが天から下って来たのは、自分のところを行なうためではなく、わたしを

二 ストレスからの解放

遣わした方のみこころを行なうためです。わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。

(ヨハネの福音書 6章38〜40節)

だれも神を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。

(ヨハネの福音書 6章46節)

しかし、イエス様に仕えている弟子たちの中にも、イエス様のことを正しく見る事ができない者がおりました。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずですよ。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」ピリポはイエスに

言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。」

(ヨハネの福音書14章6〜11節)

イエス・キリストの弟子たちは、イエス様に身近かに接しており、イエス様がどなたであり、何のためにこの世においでになったのかを、このように直接イエス様ご自身から、はっきり聞いていたにもかかわらず、まだイエス様のおっしゃったことを正しく把握することができませんでした。なぜでしょうか。それはイエス様を「人」として見ていたからであります。

二 ストレスからの解放

ですから、イエス様が捕えられて十字架ではりつけにされたことは、彼らにとってたいへんなストレスでした。弟子たちは、信頼していた「人」を失い、そのうえ自分たちも捕えられるのではないかと、不安と恐怖におびえ、戸を閉めて家の中に閉じこもっていたのです。そこに、復活したイエス様がお現われになりました。

その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。

(ヨハネの福音書20章19〜20節)

弟子たちは、このように復活のイエス様にお会いして、はじめてイエス様がどなたであり、またご自分の約束は必ず果たす方であることを、頭で理解したのではなく、たましい、霊で知ったのであります。それは御霊によって霊の目が開かれたからです。その結果、彼らの開かれた霊には、イエス様から平安が与えられ、それによって恐怖が取り去られ、喜ぶことができたのです。

このように、私たちが神様の人格に信頼することは、とりもなおさず神の御子イエス様

の人格に信頼することであります。ではイエス様の人格はどのようにして知ることができのでしょうか。イエス様は、私たちの恐れや不安、苦しみや悲しみを、ご自分も味わってくださるほどの愛の方であります。その一例がゲッセマネにおけるイエス様の祈りのときにも見られます。

ゲッセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。」そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れで行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。そして彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」

(マルコの福音書14章32〜34節)

神であるイエス様が、人となって私たち人間が味わうのと同じストレスを味わわれたのは、私たちの肉の弱さを知ってくださるためであったのです。イエス様の人格とは、このような私たちに對するあふれるばかりの愛とあわれみに富むものであります。聖書ではこれについて次のように言っています。

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

二 ストレスからの解放

すから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

(ヘブル人への手紙 4章15〜16節)

またパウロは、イエス様の限りなく真実な人格について、次のように言っています。

私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。

(テモテへの手紙第二 2章13節)

このような愛とあわれみそのもの、真実そのものの人格をお持ちのイエス様に、私たちは信頼するのであります。

ストレスを代わりに負ってくださるイエス

大きなストレスは、私たちに重荷となつて、のしかかって来ます。しかし、主イエス様は次のように呼びかけてくださっています。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あ

あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

(マタイの福音書11章28〜30節)

主イエス様に心から信頼して、助けを呼び求め、重荷を主にゆだねるとき、愛とあわれみと真実に満ちたイエス様は、この約束通り、私たちを重荷から、ストレスから完全に解放してください。数多くのキリスト者が、この体験を証してあります。

まだイエス様に信頼したくてもできないとおっしゃる方、あるいはイエス様にゆだねたくてもゆだねられないという方は、まず、自分のかたくなな心を砕いて、霊の目を開いていただくように、心からイエス様に祈り求めることが大切です。必ずイエス様は祈りに答えてくださり、弟子たちの霊の目を開いて、ご自分を現わされたように、御霊の助けによってその方の霊の目を開いて、ご自分と出会わせてくださいます。

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあらわれるからです。

(ローマ人への手紙10章11〜12節)

二 ストレスからの解放

今の世の中は、ストレスに満ちていると言っていてよいでしょう。多くの方々が人間関係の破綻や生活環境の激変などから生じる不安、緊張、恐れ、重荷を負って悩み、苦しんでいます。イエス様はそのようなおひとりおひとりに対して、今このときも、「わたしの所に来なさい。わたしがあなたに代わってあなたの重荷を負ってあげます。」と呼びかけておられることを、どうか知っていただきたいと、切に願う次第です。

三 自分の日を正しく数える

私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは
は労苦とわざわざいいます。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。だれが御
怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。
その恐れにふさわしく。それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えて
ください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。

(詩篇90篇10〜12節)

今日は、このみことばの中から、自分の日を正しく数えるとは、どういうことかをこい
しよに考えてみたいと思います。

三 自分の日を正しく数える

この世の自分のいのちは束の間

自分の日とは、自分のこの世のいのち、この世に残された自分のいのちのことでありま
す。私たち人間は、自分のこの世にあるいのちについて、どのように考えているのであり
ましようか。日頃は忙しさにかまけて、深く考えることがないのではないのでしょうか。し
かし、ひとりひとりの人生の歩みの間に、だれでも必ず一度はこのことを考えざるを得な
いときが来ます。

このテーマについては、古今東西を問わず、いわゆる賢人、学者、知者と言われる人た
ちが、いろいろな提言をしております。しかし、そのようなものを読み、それらの人の考
えを頭で理解することはできても、それに心から同意することはなかなかできないのでは
ないでしょうか。ある人にとっては、それは真理であっても、万人にとって真理ではない
からです。

しかし、私たちは、自分のいのちをどのように考えたらよいかということについて、幸
せなことに、いのちのことばの書である聖書を、神様の恵みによって与えられています。
冒頭のみことばにあるように、神様は、私たちにそれぞれ、自分の日を正しく数える知恵

を聖書を通して与えてくださるはずであります。「自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」と心から神様に願えば、必ず神様は真理の答えを私たちに与えてくださいます。その聖書によって、「自分の日を正しく数える」という主題について、御霊の導きをいただきながら考えてみたいと思います。聖書には、この世のいのちのはかなさを、いろいろな言葉、たとえば、夢、影、雲、草花、霧などで言い表わしています。

あなたはこのことを知っているはずだ。昔から、地の上に人が置かれてから、悪者の喜びは短く、神を敬わない者の楽しみはつかのまだ。たとい彼の高ぶりが天まで上り、その頭が雲まで及んでも、彼は自分の糞のようにとこしえに滅びる。彼を見たことのある者たちは言う。彼はどこに居るのかと。彼は夢のように飛び去り、だれにも彼は見つけられない。

(ヨブ記20章4〜8節)

私たちは、すべての父祖たちのように、あなたの前では異国人であり、居留している者です。地上での私たちの日々は影のようなもので、望みもありません。

(歴代誌第一29章15節)

三 自分の日を正しく数える

女から生まれた人間は、日が短く、心がかき乱されることでいっぱいです。花のように咲き出では切り取られ、影のように飛び去ってとどまりません。

(ヨブ記14章1〜2節)

人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。

(ペテロの手紙第一1章24節)

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなのですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。

(ヤコブの手紙4章14節)

人間のこの世のいのちは、これらのみことばに表現されているように、束の間のはかないものであります。冒頭のみことばにあるような七十年、八十年という人のいのちは、たいへんに長いように感じますが、私自身の体験から言っても、若いときには七十歳、八十歳は、はるかに遠い先のように感じていましたけれども、七十歳近くになった今、振り返ってみると、それはあっという間でありました。まだ気だけは若いつもりですが、付き合ってくれる大学の研究仲間や後輩、教え子などは私を老人扱いにします。自分では気づかな

かったのですが、よくよく鏡を見るとそのように扱われても止むを得ないと思います。

また、七十年、八十年と書いてあるから、だれでもそのくらいは生きられるかと言うと、そのような保証はありません。たしかに、今日、日本人の平均寿命は、男が七十余歳、女が八十余歳になりましたが、これはあくまで統計的な予測値であり、個々の人には当てはまらないのです。

人のいのちは神が定められる

詩篇の九十篇に、

あなたは人をちりに帰らせて言われます。「人の子らよ、帰れ。」

(詩篇90篇3節)

とあります。神様が私たち人間に、「人の子よ。帰れ。」とおっしゃったときには、私たちがこの世を去らなければなりません。私たちが、もっとこの世にいたいと思っても、あるいはそれとは逆に、早くこの世を去りたいと思っても、神様が定められたときでなければ、この世を去ることはできないのです。すなわち、私たちのこの世のいのちは、神によって定められているのであり、人間が決めることではありません。世界で最も賢い人と言わ

三 自分の日を正しく数える

れたソロモンは、伝道者の書の中で、

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれ
るのに時があり、死ぬのに時がある。

（伝道者の書3章1〜2節）
と言っています。この「時」というのは、神様が定められたときという意味であります。

医学の分野では現在、老化の研究がたいへんに進んでいます。老化はどうして起こるのであろうかということをいろいろ調べて行くと、老化のメカニズムに最も大きく関与しているのは免疫機能であることがわかって来ました。免疫機能が狂うことが老化を進める大きな要因となっているのであります。免疫機能というのは、ウイルスや細菌から私たちのからだを防御する、たいへんに大切な機能ですが、この機能は二十歳がピークで、それからどんどん低下し、四十歳には二十歳の半分になり、七十歳には十分の一になります。ですから若い人は肺炎で死ぬことはまずありません。免疫機能が活発に働いて、体内に侵入した肺炎菌を殺してしまうからであります。しかし、老人になると肺炎で亡くなる方が多くなります。それは、以上のような理由だからです。

もう一つ、たいへんに興味のあることがわかって来ました。私たちを守るために、外か

ら侵入して来た細菌などを攻撃すべき免疫細胞が、老人では、私たちを守るのではなく、反対に私たちを攻撃して来るような細胞に変身してしまうのです。七十歳になると、このような敵味方を取り違えた免疫細胞が、若い人の倍くらいに増えます。そのような免疫機能の狂いが起こらないように、いろいろ研究が行なわれていますが、結局人間の力ではどうしようもないということがわかって来ました。多くの専門家は、老化は制御することができないものであると考えています。その根拠は、免疫機構の変調は遺伝子の中に、時間のプログラムが組み込まれているために起こるので、生まれたときからその時限装置が動き始めるために、人間の力では制御することはできない、それを元に戻すことはできない、というのであります。

しかし、私たちキリスト者には、そのようなことは、とうの昔からわかっていたことであります。すなわち、神様がそのいのちの時限装置をお造りになって、ご自身でスイッチを入れられるということがわかっていたのです。神様は次のようにおっしゃいました。

そこで、主は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齡は、百二十年にしよう。」と仰せられた。

(創世記6章3節)

三 自分の日を正しく数える

「人が肉にすぎない。」とは、神様に背いた罪の結果、霊の死んだ人間、霊が神様に正しく反応しない人間、すなわち、アダムをはじめとしたすべての人間のことです。神様が、このように決められて以来、人間のいのちの上限は百二十年になりました。どんなに環境が良くても、どんなに栄養が良くても、これまでに百二十年以上生きた人はいません。というのは、老化という時限装置が神様によって設定されているからであります。そして神様は、さらに細かく、ひとりひとりのいのちの時限装置を設定されています。

ですから、私たち人間は、自分の力で生きていると思ったり、医者がいのちを延ばしてくれると思いがちですが、それは間違いであり、実は神様によって生かされているのであります。そして神様のときが来なければ死ぬことはできないのです。また私たちは、神様から与えられた賜物である科学や医学によって、人のからだの構造や機能が、いかに精緻なものであり、神様だけがこれをお造りなることができるということも知ることができます。

神から与えられた、この世のいのちをどう生きるか

そのような神様によって造られ、神様によって生かされている私たちのいのちを、いっ

たいどのように使ったらよいか、どのように生きるかということが、冒頭にある、「自分の目を正しく数える」ということの意味になるのであります。

一、この世の人は、自分のいのちを恐れながら生きる

普通一般には、自分に与えられたいのちなら自分のものだから、自由に使っても良いではないかと考えますが、しかし、神によって生かされているいのちを、自分の楽しみを追い求めるために使うことが、はたして自分のいのちを正しく数えることになるのかどうか、もう一度よく考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

ソロモンはまた、次のように言っています。

人は長年生きて、ずっと楽しむがよい。だが、やみの日も数多くあることを忘れてはならない。すべて起こることはみな、むなしい。若い男よ。若いうちに楽しみ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。だから、あなたの心から悲しみを除き、あなたの肉体から痛みを取り去れ。若さも、青春も、むなしいからだ。

三 自分の日を正しく数える

ここに、私たちに与えられたいのちを、自分の楽しみのために使う者に対する神様の警告が示されています。

(伝道者の書11章8〜10節)

アメリカ医師会雑誌の最近号に、ひとりの七十四歳の老医師の、「私の提言」というエッセイが掲載されていました。その内容を要約してご紹介しますと、「私は友人の八十歳代のふたりの老医師とレストランに行く車中で、どうしたら早く楽に死ぬるかという会話をした。しかし、私は友人たちよりも健康で長く生きそうである。酒も飲まないし、たばこも吸わないし、血圧も正常だし、コレステロールも高くない。だから心筋硬塞しんきんこうそくや脳硬塞のうこうそくで死ぬことはなさそうである。すると、私が死ぬ病気は苦痛が長く続くガンしかない。これはいへんである。友人たちがうらやましい。そこで私は私の運命に、もっと積極的に関わる決心をした。レストランの席に着いて、メニューに目を通し、いちばん厚い生焼けのローストビーフを注文し、山盛りのフレンチフライを添えてもらった。また、これまでブラックで飲んでいたコーヒーに砂糖と生クリームをたっぷり入れた。そしてウェイターに言った。『すまないが、バターをこっちに回してくれないか。』と。」

彼は半分やけっぱちで、ガンになるくらいなら、ダイエットなんか止めて、今からコレ

ステロールも血圧も高くして、ガンよりも苦しみの短い心臓血管系の病気になって死のうと考えたのであります。何という、あわれな、気の毒な医者でありましょうか。ソロモンは伝道者の書の中で、

実に、知恵が多くなれば悩みも多くなり、知識を増す者は悲しみを増す。

(伝道者の書1章18節)

と言っていますが、これは真理であります。彼は、医者であるがゆえに、どんな病気で死ねば苦しみが多いか、少ないかという知識を持っていました。その知識を自分のいのちに当てはめたために、ガンと死の恐怖におののきながら、これからも空しく自分の日を数えて生きなければならぬのであります。

ガンの告知も今日、問題になっていきますが、ガンの告知を受けたときに、その患者さんが自分の日を正しく数えることができるかできないかによって、天国と地獄の差が生じます。自分のこの世に残された日数を数えて、死の恐怖と不安におののきながら過ごすか、あるいは天国に入る日が近づくのを喜びと希望をもって待つかの違いであります。

ガンであることを知らされても、天国に入る日が近づくのを喜んで待つことができるために、まことの神様に対して、素直に自分が神様に背いていたことをあやまり、神の御

三 自分の日を正しく数える

子イエス様が十字架の上で流された聖い血によって自分の罪が洗われ、イエス様の復活による永遠のいのちが与えられることを感謝することが必要であります。ヨハネは次のように言っています。

もし、私たちが人間のあかしを受け入れるなら、神のあかしはそれにまさるものです。御子についてあかしされたことが神のあかしだからです。神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

(ヨハネの手紙第一 5章9〜13節)

「御子を持つ者はいのちをもっている。」というのは、イエス様を信じる者の中にイエス様が住んでくださっているということであり、言いかえればイエス様のいのち、すなわ

ち、永遠のいのちを持っているということでありませう。

二、キリスト者は、自分のいのちを主にゆだねて生きる

そのように、イエス様の永遠のいのちをいただいた者は、この世において、そのいのちを自分のために使うことが正しくないことは言うまでもありません。ではどのように自分のいのちを使えば正しいのでしょうか。その答えは聖書の中にあります。ソロモンは、次のように勧めています。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言3章5〜6節)

私たちキリスト者は、地上の歩みにおいても、イエス様を信じたときすでに与えられている永遠のいのちを、自分の知恵や知識や欲望に従って生きることに使うのではなく、主から目を離さず、心を尽くして主に拠り頼み、主から示していただいた道を歩みながら生きることに使うのであります。

また、詩篇の作者は次のように主に祈っています。

三 自分の目を正しく数える

主よ。あなたの決めておられるように、私を生かしてください。

(詩篇119篇149節)

なぜ「私はどうでもいいです。神様、あなたが決めておられるように、私を生かしてください。」というようなことが言えるのでしょうか。それは自分のいのちは主に生かされているいのちであり、その神に心から信頼し、おゆだねし、みこころに従って生きることこそ、正しいいのちの使い方であることを知っているからであります。イエスを愛して信仰によって霊的に新しく生まれ代わった私たちも、イエスがどんなに自分を愛してくださっているかをよく知っています。そして、自分のために今でも、またこれからも、祈ってください、とりなしてください。イエス様に対して、人格的に全き信頼を置いています。ですから、私たちも、新しくされた私たちのいのちの正しい使い方について、イエス様に、「主よ。あなたの決めておられるように、私を生かしてください。」と祈ることができるのであります。

パウロは、キリスト者は生きるも死ぬも自分のためではなく、イエス様のためであると、次のように言っています。

私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分の

ために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

(ローマ人への手紙14章7〜8節)

キリスト者とは、キリストを持つ者であり、同時にキリストに所有されている者であります。ですから、生きることも死ぬことも、イエス様が益としてくださることを信じ、イエス様に信頼して、自分をゆだねることができるのです。パウロはまた次のようにも言っています。

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

(コリント人への手紙第二5章15節)

パウロは、キリストのものとされた私たちの生きる目的は、もはや自分のためではなく、自分のために十字架にかかり、復活してくださったイエス様のため、すなわち、主の栄光が現わされるためである、と言い切っています。これは、心から主のものとされた

三 自分の日を正しく数える

ことを感謝し、その主に信頼し、ゆだね切ってはじめて言えることでもあります。このように、私たちも、一日一日をイエス様に感謝しつつ、主に信頼し、主のみこころを問いなながら、御霊に導かれて歩むことの積み重ねが、「自分の日数を正しく数える」ことになるのではないのでしょうか。

生まれながらの人間はどんなに知恵を絞って考えても、自分の日を正しく数えることはできません。自分の日を正しく数えることができるのは、御子イエス様を信じ、イエス様の贖いの代価によって買い取られて、主のものとされた者だけに与えられた特権であることを心から感謝し、この地上に残された自分の日を正しく数えながら、歩むことができるように祈って行きたいと切に思います。

四 宗教の神と聖書の神

私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。なるほど、多くの神や、多くの主がある中で、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。

(コリント人への手紙第一 8章4〜6節)

今日は、宗教の神と聖書の神という大切なテーマについて、ごいっしょに考えたいと思

四 宗教の神と聖書の神

います。少し難しいと思われるかも知れませんが、心を開いてお聞きくだされば幸いです。

私たちが信じている神とは

私たちが神様、神様、と言っている神はどんな方でしょうか。私たちが信じている神、あるいは信じたいと思っている、まことの神はどんな方か、これをはじめによく知っておく必要があります。

主はご自分のすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。

(詩篇145篇17節)

ここに、非常に簡明に神とはどんな方かが要約されていると思います。この方が、まことの神様なのです。私たちの住んでいるこの世界には、合理的に説明できないようなことが起こります。私たちは自然科学の恵みに浴していますから、科学的に、合理的に考える習慣が身につけていますが、科学的に、あるいは合理的に考えてもわからないような問題がたくさんあります。たとえば、病気の原因は、医学によってだいたいわかります。

ところが、どうして病気がこの世に存在するのか、その理由や、あるいは病気の存在す

る意味は科学ではわかりません。死は病気や怪我などによって起こるということは医学によってわかりますが、人間にどうして死があるのかということは、医学ではわかりません。そこで人間は、これらの自分自身では理解できないこと、自分の力の及ばないことを、自分で考え出した「神」によって解決しようとして来たのであります。

人間の考え出した宗教の神々

まず日本の神について考えてみましょう。国文学者の本居宣長は、『古事記伝』の中で神とはどんなものかということについて次のように書いています。「神とは天地のもろもろの神たちを初め、それを祭る社にいる御霊を言い、また人は言うまでもなく、鳥獸本草のたぐい、そのほか何でも普通でないようなすぐれて、恐れ多いものを言う。」すなわち、日本では、普通でない、すぐれて恐れ多いものは、何でも神にしてしまうのです。ですから、八百万の神というように、数え切れないほど多くの神がいることになっています。神道ではそういう神々を信仰の対象にしているわけです。

仏教はインドのゴータマ・ブッダ、日本でいう釈迦が考え出した宗教です。釈迦は、「神仏は無い」と言っていました。ところが仏教はその後いろいろに変形して来しました。

四 宗教の神と聖書の神

そして、大乗仏教だいじやふつぎょうになるとたくさんのお（ほとけ）が出て来ます。仏教の開祖が言わなかったのに、その弟子たちが釈迦の教えに付け加えて、多くのおや、おの候補者と言われている菩薩ぼさつを造り出したのです。

私たち人間は、目に見えない神をなかなか把握することができません。ですから、目に見える形で納得しようと思って、いろいろな神仏の像を造ります。石や金銅あるいは木で造った神仏の像や、像でなくても神仏の名前を書いた紙や板を見れば納得して、それを拜むというのが人間のしていることです。

また、日本では神と仏は、神仏というように一体として考えられています。なぜ、神仏が一体なのでしょう。それは、人間は死ぬと「ほとけ」になるが、死んで三十三年あるいは五十年経つと「ほとけ」が「神」に変わるといふ日本人独特の考えからです。「ほとけ」として存在している間は、何回忌なんかいというように法事を行いますが、三十三年あるいは五十年で打ち切られます。これを忌上げと言いますが、それは「ほとけ」が「神」になるからだということ。死んでしばらくは「ほとけ」ですが、古くなると「神」になるというわけです。

ちなみに、「ほとけ」といふのは、悟りを開いた人という意味です。悟りを開くという

ことは、どういふことかと言いますと、欲望に支配されないということ。『生きぼとけ』というのは、生きていても欲望に支配されない人を言うのです。しかし、しばらくは「ほとけ」になれるかも知れませんが、「ほとけ」であり続けることは人間にはできません。死んで「ほとけ」になるということは、死ぬと欲望を持たなくなる、それは悟りを開いた人と同じになるからであるという理由によるのです。日本人が神仏を一体として考えるのは、こういうところから来ているのです。

もう一つ、おかしいと思うことは、宗教では神に分業あるいは役割分担させていることです。それは宗教家、聖職者と言われる人々が考え出したものなのです。たとえば、商売の神がいます。商売繁昌を願う人は、その神のところへ行ってお金をあげて、お札をもらって来ます。学問の神は受験のときに必要です。安産の神には、お産の前に行き「無事にお産ができますように、丈夫な子が授かりますように。」と言って祈願します。また、いろいろな病気を治す神々もいます。安全の神もいます。これらの神々はみな、人間が勝手に造って、祭り上げている神です。

結局このように人によって造られた神々は、ご利益目当ての人たちに対して、それらを造り出した人々の商売に利用されているのです。ですから宗教ほど儲かる商売はないとい

う言葉はまさに当たっています。世の中が荒れてきて、暗くなればなるほど宗教は儲かります。少し考えれば、人間が造り出した神仏にそのような力はないということはおわかりに、人間は、そのように人に造られた神に頼っているのが現実です。それは、そのような人たちがまことの頼るべき方を知らないために起こっている現象であります。聖書では、人が造った神のことを次のように言っています。

国々の民のならわしはむなしからだ。それは、林から切り出された木、木工が、なたで造った物にすぎない。それは銀と金で飾られ、釘や、槌で、動かないように打ちつけられる。それは、きゅうり畑のかかしのように、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならない。そんな物を恐れるな。わざわいも幸いも下せないからだ。

(エレミヤ書10章3〜5節)

まったく、その通りではないでしょうか。

彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。手があってもさわわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。これを造

る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。

(詩篇115篇4〜8節)

これは、人間が造った偶像の神に信頼する人は、霊の目や耳や口が閉ざされているということを言っているのです。

偶像を造る者はみな、むなししい。彼らの慕うものは何の役にも立たない。彼らの仕えるものは、見ることもできず、知ることもできない。彼らはただ恥を見るだけだ。だが、いったい、何の役にも立たない神を造り、偶像を鑄たのだろうか。見よ。その信徒たちはみな、恥を見る。それを細工した者が人間にすぎないからだ。彼らはみな集まり、立つがよい。彼らはおのいて共に恥を見る。鉄で細工する者はなたを使い、炭火の上で細工し、金槌でこれを形造り、力ある腕でそれを造る。彼も腹がすくと力がなくなり、水を飲まないと疲れてしまう。木で細工する者は、測りなわで測り、朱で輪郭をとり、かんなで削り、コンパスで線を引き、人の形に造り、人間の美しい姿に仕上げ、神殿に安置する。彼は杉の木を切り、あるいはうばめがしや檜の木を選んで、林の木の中で自分のために育てる。また、月桂樹を植えると、大雨が育てる。それは人間のたきぎになり、人はそのいくらかを取って

暖まり、また、これを燃やしてパンを焼く。また、これで神を造って拝み、それを偶像に仕立てて、これにひれ伏す。その半分は火に燃やし、その半分で肉を食べ、あぶり肉をあぶって満腹する。また、暖まって、『ああ、暖まった。熱くなった。』と言う。その残りで神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈って『私を救ってください。あなたは私の神だから。』と言う。彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさがって見ることもできず、彼らの心もふさがって悟ることもできない。彼らは考えてもみず、知識も英知もないので、『私は、その半分を火に燃やし、その炭火でパンを焼き、肉をあぶって食べた。その残りで忌みきらうべき物を造り、木の切れ端の前にひれ伏すのだろうか。』とさえ言わない。

(イザヤ書44章9〜19節)

これが人間が造って、頼っている神です。預言者エレミヤは、まことの神様に次のように申し上げます。

あなたのもとに、諸国の民は地の果てから来て言うでしょう。「私たちの先祖が受け継いだものは、ただ偽るもの、何の役にも立たないむなしものばかりだった。

人間は、自分のために神々を造れようか。そんなものは神ではない。」と。

(エレミヤ書16章19〜20節)

まさに、私たちの先祖が受け継いだものは、空しい偶像の神、生きていない神なのであります。そしてこれが宗教の神であります。

まことの神はどんな方か

それに対して聖書の神様はどんな方でしょうか。その方は宗教の神ではありません。これから、聖書によって明らかにされている、まことの神のご性質について、聖書から見えてみたいと思います。

一、生ける神

まず第一に、聖書の神は生きた神です。

——わたしは生きている。神である主の御告げ。——

(エゼキエル書5章11節)

聖書のあちこちで、神様は自ら「わたしは生きている。」とおっしゃって、人間の前に

ご自身を明らかにしてください。神様は、私たちの肉の目には見えませんが、霊の目が開かれると見ることが出来ます。ちなみに、聖書の中で「わたし」とひらがなで書かれたところは、神様がご自分を指しておっしゃっている言葉です。

二、万物の創造者なる神

第二に、創造者の神、造り主である神、これが聖書の神の特性です。創世記の一章から二章にかけて、神様が創造主であるということが書いてあります。創世記の一章一節には、初めに、神が天と地を創造した。

(創世記一章一節)

という、有名な箇所があります。次に神様は光を造り、闇やみを造り、そして地の上にいるいろいろな生物をお造りになった、そして神様の創造の最後に、人間をお造りになった、とあります。すなわち、すべてのものを造られた神です。イザヤ書の四十四章二十四節には、このようなきことばが書かれています。

あなたを贖い、あなたを母の胎内にいる時から形造った方、主はこう仰せられる。

「わたしは万物を造った主だ。……」

(イザヤ書44章24節)

聖書の神様は、私たちひとりひとりを母親の胎内にいるときから造ってくださった神様であります。

三、唯一の神

第三に、聖書の神は唯一の神であるということです。

わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。

(イザヤ書45章5節)

預言者イザヤを通して、神様は自ら、「わたしが唯一の神である。」と宣言しておられるのです。

四、永遠に存在する神

第四に、聖書の神は永遠に存在される神であります。

万軍の主はこう仰せられる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。」

(イザヤ書44章6節)

四 宗教の神と聖書の神

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

(ヨハネの黙示録1章8節)

「初めであり、終わりである。」「アルファであり、オメガである。」ということは時間を越えた存在、すなわち永遠であるということです。神様ご自身が、「わたしは永遠に存在する。」と、おっしゃっているのです。

五、聖にして主なる神

第五に、聖書の神は聖なる方であり、主なる神であります。

国々の民よ。大いなる、おそれおおい御名をほめたたえよ。主は聖である。

(詩篇99篇3節)

聖とは汚れからの完全な分離、遮断を意味する神の尊厳性、超越性を現わす言葉であります。また、主とは何でしょうか。主とは主権者、すべての被造物に仕えられるべき方あります。聖書の神様は、聖にして主なる神様であります。

神はモーセに告げて仰せられた。「わたしは主である。」

この「主」という言葉は、聖書の神様を受け入れ、信じて、その神様に仕えるものとされた者だけに言える、神様に対する呼びかけの言葉であります。詩篇は、神様と詩篇の作者の祈りを通しての交わりが記された書ですが、その詩篇には、多くの箇所、「主よ、主よ、」と神様に呼びかけているのが見られます。私たちも祈りの中で、「主よ、」とお呼びするのは、私たちと神様との関係がそのようなものである、私たちは神様に仕えるものである、ということを意味しています。

次の詩篇は、私たちを造り、愛し、導き、守ってくださる神様を、主と仰いでお仕えできる喜びと、感謝の心が溢れている詩であります。

全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。知れ。主こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。

四 宗教の神と聖書の神

六、全能なる神

第六に、聖書の神は全能なる方であります。

ああ、神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。

あなたはまた、御民イスラエルを、しるしと、不思議と、強い御手と、伸べた御腕と、大いなる恐れとをもって、エジプトの国から連れ出し、あなたが彼らの先祖に与えると誓われたこの国、乳と蜜の流れる国を彼らに授けられました。

(エレミヤ書32章17節、21〜22節)

預言者エレミヤが言っているように、神様に選ばれたイスラエルの民は、長い間奴隷として働かされていたエジプトから、神様のお導きによって連れ出されて、乳と蜜の流れるカナンの地に入ることができました。これはイスラエルの民の力によるものではありません。彼らは何もできなかったのです。このイスラエル民族のエジプト脱出は、はじめから終わりまで、全能の神様がご自身の全能の力によって、恵みとしてなしてくださいました。であります。

それと同じことを私たちも体験します。全能の神様の恵みによって、私たちは選ばれ、唯信じることによって救われて、永遠のいのちをいただき、そしてこの地上を、天にあるカナンの地目指して歩むことができますが、それは、まったく私たちの努力や知恵によるものではありません。私たちのわがままで、自分勝手な性質が砕かれ、まことの神様の前にへりくだるものとなるのも、自分の力によってできるものではありません。全能の神様だけがおできになることです。

七、三位一体の神

第七に、聖書の神は三位一体の神であります。

三角定規を頭に思い浮かべてください。一つの三角定規には三つの角があります。神様を三角定規にたとえますと、神様はおひとりですが、三角定規にある三つの角のように、三つの特性を持っておられます。一つは、父なる神様、つは子なる神であるイエス・キリスト、もう一つは御霊なる神様です。これらは別々の神様ではなくて、それぞれのときに応じて、ご自分を父なる神、子なる神、御霊なる神として現わされるといふことです。父なる神様は、おもに旧約時代にイスラエル民族を通してご自身を現わされました。そ

の後、人間の罪の救いのために、御子なる神イエスとして、ご自身をこの世界に現わされました。御子なる神が復活して天に戻られた後、私たちのところに来てくださった神が御霊なる神様です。これが三位一体の神様です。すなわち、それぞれの時代にふさわしい形で、私たち人間のところに来てくださる神様です。そのようなことがおできになるのは、聖書の神様だけです。創世記一章で神様は、

「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」

(創世記1章26節)

とおっしゃっています。神様がおひとりだったら、何で「われわれ」とおっしゃる必要があるのでしょうか。それは、はじめから神様は一つの神様ではありませんが三位一体の神様だったからです。聖書にはこのことを現わす箇所がたくさんあります。

神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い

所の大能者の右の座に着かれました。

(ヘブル人への手紙1章1〜3節)

神の本質の完全な現われということは、神様ご自身ということです。したがって御子なる神様は、神様そのものであるということを言い表わしているのです。

わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。

(ヨハネの福音書15章26節)

この一節に、父なる神様、「わたし」と言っておられる子なる神様であるイエス・キリスト、そして御霊なる神様の三つが全部含まれています。このみことばは、私たち人間に対して神様がお互いにどのように働いてくださっておられるのかという関係をよく現わしていると思います。

しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。父が持っておられる

ものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。

(ヨハネの福音書16章13〜15節)

三位一体の神であられるからこそ、父なる神様、御子なる神様、御霊なる神様が、一つの神であられながら、私たちに対して、それぞれいちばんふさわしい形でご自身を現わしてくださいるのであります。

八、砕かれた心に住まわれる神

第八に、聖書の神は砕かれた人の心に住んでくださる神であります。

偶像の神は神社や神だなに置かれていますが、聖書の神様は砕かれた人の心に住んでくださる方です。

いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖ととなえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。」

(イザヤ書57章15節)

なぜ、聖にして全能の神様が、人の心の中に住んでくださるのか、その目的がここに示されています。しかし、だれの心にも住んでくださるというのではありません。ここに言われているように、心碎かれて、神様の前にへりくだった者の心の中だけに住んでくださるのです。

イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」

(ヨハネの福音書14章23節)

心碎かれて、へりくだった者はだれでも、イエス様を、そして父なる神様を、自分の主として受け入れ、愛するはずで、すから、イエス様はこれにおっしゃったのです。見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(ヨハネの黙示録3章20節)

これも、私たちの心の中に住んでくださるうとして、心のとびらを叩いてくださってお

四 宗教の神と聖書の神

られる主であります。私たちがほんとうに心が砕かれて主に心のとびらを開いたときに、主イエスは私たちの心の中に入ってくださり、しかも食事をともにしてくださいます。食事をともにするのは、主と私たちとの関係の親しさを現わす言葉です。聖書の神様はそのような方であります。お宮や仏壇の中には決してお住みにならない神様です。

九、人格を持ち、私たちが永遠に愛してくださる神

最後に、聖書の神は人格を持った神です。冷たい無人格の神ではありません。

主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。

(ヘブル人への手紙12章6節)

人格を持った神様でなければ、このようなことはなさいません。親が子を懲らしめるときは、親が子の人格を認めるからこそ、子どものためと思つて懲らしめるのです。人格を認めない対象に対しては、私たちは懲らしめなどしません。神様は、私たちが愛して下さるから、私たちの人格を認めてくださるから、懲らしめるのです。ということは、神様も人格を持っておられるのです。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。

(エレミヤ書33章3節)

このように、呼んだ者に答えてくださるのは、人格を持っておられる神様だからこそであります。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。……」

(イザヤ書43章1〜4節)

人格を持っておられる神様でなければ、こういうことをおっしゃるはずがありません。このまことの神様を認めようとせず、背いているところに、人間の不幸があるのです。そ

四 宗教の神と聖書の神

して、人間の造った偶像の神、宗教の神には、決してこの人間の不幸を救うことはできません。創造者であられ、ただ私たちを愛してくださる生けるまことの神様は、私たちが、御子なる神イエス様の十字架の贖いが、この自分の罪の代価としての犠牲であったことを、心から悔い改めて受け入れたときに、私たちに完全な罪からの赦しと永遠のいのちを無代価で与えてくださるのです。何という深い愛と恵みでありましょうか。そして、そのときに私たちは、まことの神様の栄光をほめたたえる者へと変えられるのであります。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

(エペソ人への手紙1章3〜6節)

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあつ

たのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

(コロサイ人への手紙1章21〜22節)

ほんとうの幸せを得るためには、まことの神に立ち返ること

このようにして、人間が主なる神様のもとに立ち返って、神の子どもとして私たちを救い出してくださいました神様のみことばに聞き従うところに、人間のほんとうの幸せがあるのです。

私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。そればかりでなく、私たちのために今や和解

四 宗教の神と聖書の神

を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。

(ローマ人への手紙5章8〜11節)

「神を大いに喜んでいる。」という言葉から、主イエス様によって罪から救い出されて神の子どもとされた者の幸せいっばいの気持ち伝わって来るようです。

これまで、ごいっしょに考えて来たことから私たちに明らかにされたことは、聖書の神様こそ私たちが信じるべき神様であり、いのちのない宗教の神仏とはまったく違う、生けるまことの神様であるということです。私たちも、この神様に、心からの喜びと感謝をもってお伝えしたいと切に思います。

五 神の奥義としての処女降誕

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたの子ヨセフを迎いなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

(マタイの福音書1章18〜21節)

神の救いの奥義

聖書には、人の知恵では理解することのできない、隠された神の奥義が書かれています。それは、神の御子イエス・キリストによる、神の救いのご計画であります。神の御子が人となつて、人間を救うためにこの世に來られた、それがイエス・キリストであるということは、人間の理解を越えたことであります。神の民として選ばれ、旧約聖書において、すでに神が約束しておられるメシヤの到來を待望しているユダヤ人さえも、そのメシヤが、神が人となられたイエス・キリストであることを信じていることができませんでした。たとえば、イエス様の郷里の近くの人々は、イエス様をヨセフとマリヤの子としか見ることができなかつたのです。

ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下つて來たパンである。」と言われたので、イエスについてつぶやいた。彼らは言った。「あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている、そのイエスではないか。どうしていま彼は『わたしは天から下つて來た。』と言うのか。」

(ヨハネの福音書6章41〜42節)

ですから、パウロも、この神の救いの奥義を知るためには、人の知恵によらず、御霊によらなければならぬと言っています。

私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のごとは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみごころのごとは、神の御霊のほかにだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用い

五 神の奥義としての処女降誕

ます。その御霊のことはをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわかまえるものだからです。

(コリント人への手紙第一 2章7〜14節)

神の救いの奥義は、具体的にはキリストの降誕、十字架、復活、昇天、再臨などによって現わされていますが、どれ一つとして、人の知恵では理解できるものはなく、すべて御霊によってのみ、わかまえることができます。

今日は、キリストのご降誕の恵みをおぼえる日に当たりますので、ここに挙げた神の奥義の中で、イエス・キリストの誕生において示された処女降誕、処女受胎について、御霊の導きによってごいっしょに考えてみたいと思います。

処女受胎は神の奥義

聖書を読むとき、多くの人は、キリストが処女から生まれたということに、まず、つまづくのではないでしょう。人間の常識では、あるいは科学的には、とうてい考えられな

い不可能なことだからです。ですから、昔から人々はそのようなことを、まともに信じるのは馬鹿げていると、頭から否定します。今日、クリスチャンの中にもイエス・キリストの処女受胎、処女降誕を否定する人々が少なからずいるのです。また、キリストが処女から生まれたかどうかということは、信仰にとって、どうでもよい問題ではないかと考えている信者もいます。

したがって、それらの人々は、どうしてキリストが処女から生まれなければならなかったのか、なぜキリストがヨセフとマリヤという、私たちと同じ人間夫婦の間に生まれては、いけなかったのかということについては、もはや深く問おうともしません。

しかし、イエス様に霊的な出会いをした経験を持つキリスト者は、それによって霊の目が開かれた結果、キリストが処女から生まれたことにこそ大きな意義があり、これこそ人間にとって恵みであることを知ることができます。霊が開かれた者は、人間をお救いになる神様の大きな恵みのご計画は、イエス・キリストの処女受胎、処女降誕から、私たちの目に見えるような具体的な形で開始されるのを、御霊によって知ることができるのです。

聖霊による受胎の重要性

私たちは、御霊の導きにより、キリストが人間によってではなく、聖霊によって、みごもられたということの重要性を示されます。

聖書は、アダムが神に背きの罪を犯して以来、その子孫である人間はひとり残らず罪に汚れた者となったために死ななければならなくなったと言っています。したがって聖書は、そのような罪人である人間の男と女の間に来た子どもは、すべて生まれる前から罪の種を持つ者として母の胎に宿り、罪ある者として生まれるとも言っています。

ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。

(ローマ人への手紙5章12節)

ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。

(詩篇51篇5節)

ですからもし、イエス・キリストが私たち人間と同様に、男と女すなわち、ヨセフとマ

リヤによってお生まれになったのであれば、私たち人間と同様に、罪の性質を生まれながらにお持ちになってはいるはずですが、しかし、イエス・キリストは一生涯罪を犯されませんでした。聖書は、イエス・キリストが罪を知らない方、罪を犯されたことのない方であると言っています。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。

(コリント人への手紙第二5章21節)

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

(ペテロの手紙第一2章22節)

神の御子が、なぜ人としてこの世に生まれてくださったのでしょうか。どうしてイエス・キリストが、人間のからだを持ってくださったのでしょうか。それは死ぬためなのであります。神は永遠に存在される方、永遠に生きておられる方であります。したがって、神の御子イエス・キリストにも死はありません。そのイエス・キリストが、私たち人間の罪の代価を支払うという目的で死んでくださる、そのために、私たち人間と同じからだをもって、地上に来てくださったのであります。罪の代価は罪人が支払うことはできません。罪の代価として捧げられるからには、罪のないからだでなければならぬのです。そのため

にイエス・キリストの受胎は、男と女によらず、神の霊、すなわち聖霊によることが、どうしても必要であったのです。

処女受胎は事実

私たちは、マリヤが処女であって、聖霊によってみごもったということが事実であることを、御霊によって知ることができます。聖書には次のように記録されております。

御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。御使いは、はいつて来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その

国は終わることがありません。」そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょよう。私はまだ男の人を知りませんのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。」

(ルカの福音書1章26〜35節)

「どうしてそのようなことになりえましょよう。私はまだ男の人を知りません。」マリヤが処女として、純潔を保っていたという事実は、何よりも御使いに言った、このマリヤ自身の言葉によく表われています。彼女は神様からキリストの産みの母に選ばれたほどの、神にも人にも誠実な人ですから、神の御使いに偽りを言うことなどはあり得ません。そのことは、主なる神が一番よく知っておられるのです。

このように、処女降誕は事実であります。これは決して、処女降誕に対する信仰を説明するために、人間が造り上げた架空の話ではありません。むしろ、処女降誕に対する信仰は、処女降誕の事実の結果として生じたものであると私たちが確信できることこそ、大きな恵みではないでしょうか。

イエス・キリストが処女から生まれることに関する聖書の預言

キリストが処女から生まれるということは、イエス・キリストのご降誕の約七百年前に、主なる神が、預言者イザヤを通しても予告されてきました。

主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を「インマヌエル」と名づける。

(イザヤ書7章14節)

そして、主なる神は、この予告をその七百年後、今から約二千年前にこの世界の歴史の中に成就されたのです。マタイはこの預言の成就について、マタイの福音書に次のように述べています。

このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)

(マタイの福音書1章22〜23節)

神自ら名づけられた、「神は私たちとともにおられる。」という名ほど、神の御子にふ

さわしい名がほかにあるでしょうか。

神と人との完全な仲介者

さきほど申しましたように、アダム以来、人間はひとり残らず神から背き離れた状態にあります。これが、聖書でいうところの罪人です。しかし、神様はそのような罪人である人間をなお愛してくださり、和解によって、ふたたびご自分と親しい交わりを回復したいと切に望んでおられます。しかし、神は完全な方、完全に聖く義なる方ですから、罪に汚れた私たち人間を、そのまま受け入れることはおできになりません。神様との和解には仲介者が必要です。

仲介者とは、互いに対立する二者の間に立ち、敵意の原因を取り除くことによって、和解と一致を得させる者のことを言います。神と人との間に立つ仲介者は、旧約時代には祭司がその役割を演じていました。祭司は祭壇で神に仕え、罪のための犠牲、いけにえとして、傷のない動物の血を捧げ、とりなしの祈りを捧げて、神に対して民をとりなしていました。しかし、祭司もまた罪ある、聖くない不完全な人間であり、したがって神と人間の仲介者としても不完全でありました。そこで神は完全な仲介者として、ご自分の御子をお

立てになったのであります。

完全な仲介者には、完全に罪のない神の聖さを持つ人が求められますが、そのような仲介者の条件を満たす方は、神であって同時に、処女から罪のない聖い人として、血と肉のからだを持ってお生まれになった、神の御子イエス・キリストだけであります。神の御子であるにもかかわらず、イエス・キリストが血と肉を持つ人間のからだでお生まれになった理由は、私たち人間の罪のいけにえ、犠牲として、十字架上で死んでくださり、ご自分のからだを、ご自分の血を、神に捧げてくださるためでした。イエス・キリストが処女からお生まれになったのも、その要求が満たされるためでした。イエス様は、父なる神に次のようにおっしゃいました。

雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされるとおり、神よ、あなたのみこころを行なうために。』」

(ヘブル人への手紙10章4〜7節)

私たち人間の罪は、このように聖く、汚れもないキリストの血によって完全に聖められたのであります。ペテロはこれについて次のように言っています。

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

(ペテロの手紙第一1章18〜19節)

このイエス・キリストが、仲介者として神と人間の間立って、人間の罪のためのいけにえとなつてご自身の血を捧げてくださり、また、聖いまことの祭司として、とりなしの祈りを捧げてくださることを通してのみ、神様は私たち人間と和解してくださるのであります。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であつて、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至つてなされたあかしなのです。

(テモテへの手紙第一2章5〜6節)

神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行ないの中にあつたのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

(コロサイ人への手紙1章19〜22節)

イエス・キリストが罪のない方であることの証言

イエス・キリストが、聖霊によって処女からお生まれになつた罪のないお方であることは、聖書の多くの箇所明らかにされています。

まず、イエス・キリストご自身がユダヤ人に次のようにおっしゃっています。

あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。

(ヨハネの福音書8章46節)

人間でこのように断言できる者がいるでしょうか。人間である以上、だれでも自分の良心に真剣に問うてみれば、決してこのようなことを言うことはできません。しかし、イエス・キリストは、この世にお生まれになってから、十字架にかかって息を引き取られるまでのご生涯において、完全に聖くあられました。私たちは、サタンがイエス様に罪を犯させようと、荒野でけんめいに誘惑したにもかかわらず、イエス様はそれに勝って、罪を犯されなかったことを知っています。

イエス様を取り調べたローマの総督ピラトも、次のようにイエス様に何の罪も見られないと、イエス様を捕えたユダヤ人たちに証言しています。

ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということ、あなたがたに知らせるためです。」

(ヨハネの福音書19章4節)

イエス・キリストを裏切って、銀三十枚で祭司長たちに売り渡したイスカリオテのユダは、イエス様が罪に定められたことを知って自分のしたことを後悔し、次のように言いました。

そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして。」と言った。

(マタイの福音書27章3〜4節)

二年半の間、イエス様の側近くでイエス様のなさったこと、言われたことを見聞きして、いかにイエス様が罪汚れのまったくない、聖さそのものの方であるかを知っていないがら裏切ったこの男ほど、イエス・キリストが罪なき方であることを証言するのにふさわしい者はいないでしょう。

イエス・キリストに罪がないことの意味

私たち人間の罪の贖いのためには、完全に聖い血による聖めが必要です。その贖いは、罪ある人間の血によってはできません。それができるのは、人でありながら完全に罪のない聖い方、すなわち聖霊によって、処女からお生まれになった神の御子イエス・キリストだけであります。まさに私たち人間の罪の汚れを聖めることができる方、私たち人間の罪を贖なってくださることのできる方は、この方以外にはあり得ないと聖書が言って

いる通りであります。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

(使徒の働き4章12節)

今日は、私たちの主イエス・キリストのご降誕について、とくに、イエス様が処女からお生まれになった深い意味について、そのことが神の奥義として、神様の救いのご計画が完全に成就されるために、ぜひとも必要であったことを、御霊の導きによってごいっしょに考えて来ました。私たちは、ここに改めて、このように完全な救いの計画をお立てになり、それを成就してくださった父なる神と、御子なるイエス・キリストに、心からの感謝と賛美を捧げたいと思います。

六 ふたりはイエスとともにいた

彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。

(使徒の働き4章13節)

今日は、このみことばを通して、私たちキリスト者がイエス様とともにいることの意味、大切さについて、ごいっしょに考えてみようと思います。

イエス・キリストの弟子とされたペテロとヨハネ

ペテロとヨハネは、ともにイエス様の側近くにいた弟子としてよく知られています。このふたりは、家業として子供の頃から漁師をしていましたから、無学な普通の人であって

も当然であります。イエス様は、この無学で普通の人を弟子となさったのです。

イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」彼らはすぐに網を捨てて従った。そこからなると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。

(マタイの福音書4章18〜22節)

生まれつきの足なえに対するペテロとヨハネのわざ

「使徒の働き」の三章から四章にかけては、このイエス様のふたりの弟子、ペテロとヨハネの伝道の様子が詳しく書かれております。全部読みますと長くなりますので、ところどころ聖書から引用しながら、その内容をかいつまんでお話しします。

ペテロとヨハネは、エルサレムの神殿の門の前で、生まれつき足のきかない男から施し

を求められました。そこで、ペテロはこの男に次のように言いました。

「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」

(使徒の働き3章6節)

すると、男の足はたちまち強くなって、おどり上がってまっすぐに立って、歩きはじめ、神様を賛美しながら、ペテロとヨハネといっしょに神の宮に入って行きました。

群衆に対するペテロとヨハネの伝道

これを見ていた、たくさんの人々は驚いて彼らのところにやって来ました。ペテロはこの人々に向かってこう言いました。

「イスラエル人たち。なぜこのことに驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。」

(使徒の働き3章12節)

「イエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を

皆さんの目の前で完全なからだにしたのです。」

(使徒の働き3章16節)

そして、ペテロとヨハネは、イエス様の十字架の死と復活について力強く証しし始めたのです。群衆の中には祭司たちや宮の守衛長、死者の復活を否定しているサドカイ人たちがおり、ふたりを捕えて、大祭司、民の指導者、長老、学者たちの前に引き出しました。彼らは、ふたりに向かって、何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのかと尋問し始めました。それに対してふたりはまったく恐れることなく、次のように彼らに答えました。

祭司たちの尋問に対するペテロとヨハネの証し

「民の指導者たち、ならびに長老の方々。私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御

名によるのです。『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となつた。』というのはこの方のことです。この方以外には、だれによつても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

(使徒の働き4章8〜12節)

これを聞いて、祭司たちはたいへんに驚きました。そして救い主イエスについて、このようなことを祭司や律法学者や長老たちの前で恐れることなく、堂々と証しをするのふたりが、律法や神学の教育も受けておらず、聖書の知識もない、無学で普通の人であることを知ってますます驚きました。当時、祭司や律法学者や長老といった人たちは、神様と一般の人々の間に立って神様にとりなしの祈りを捧げたり、神様の律法を教えたりする特別の階級に属している人たちでありました。このような階級の人たちだけが神様のことばを伝える資格があるとされていたのです。

ペテロとヨハネの知恵と力の原因はどこから来たか

また、祭司や律法学者らは、ペテロとヨハネが大胆にイエス様のことを宣べ伝えただけ

でなく、足なえを立たせたという自分たちにはできないことをしたことに仰天したと思います。ですから、このふたりが、どうしてそのような知恵と力を持つようになったかを調べました。その結果、唯一つ、ふたりがイエス様とともにいたという事実だけがわかって来たのです。しかし、なぜふたりがイエス様とともにいたから、あのような知恵と力を持つようになったのかということは、いくら考えても、どうしても理解できなかったのです。冒頭で申しましたように、ペテロとヨハネは、漁をしていたときに、イエス様の呼びかけに答えてただちに網を捨ててイエス様に従い、それからずっと、ふたりはイエス様の愛する弟子としていつもイエス様の身近にいました。そのおかげで、ふたりはイエス様の上に起こった重大な出来事を見ることができました。そのうちのいくつかを挙げてみたいと思います。

第一の体験は、次のようなものでした。

それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で御姿が変わった。その御衣は、非常に白く光り、世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった。また、エリヤが、モーセとともに現われ、彼らはイエスと語り合っていた。すると、ペテロが口出し

してイエスに言った。「先生。私たちがここにすることは、すばらしいことです。私たちが、幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖に打たれたのであった。そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい。」という声があった。彼らが急いであたりを見回すと、自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった。さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。

(マルコの福音書9章27-29節)

ふたりにとって、この出来事は大きなショックであったと思います。しかし、この体験によって、彼らは自分たちの先生が、神様のところから下って来られた神の御子であるということを知ったのです。

第二の体験は、イエス様が死人をよみがえらせたのを見たことです。

イエスが、まだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人がやって来て言っ

た。「あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありましょ。う。」イエスは、その話のことはをそばで聞いて、会堂管理者に言われた。「恐れないで、ただ信じていなさい。」そして、ペテロとヤコブとヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれも自分といっしょに行くのをお許しにならなかつた。彼らはその会堂管理者の家に着いた。イエスは、人々が、取り乱し、大声で泣いたり、わめいたりしているのをご覧になり、中にはいって、彼らにこう言われた。「なぜ取り乱して、泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠っているのです。」人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなを外に出し、ただその子どもの父と母、それにご自分の供の者たちだけを伴って、子どものいる所へはいつて行かれた。そして、その子どもの手を取って、「タリタ、クミ。」と言われた。(訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい。’)という意味である。)すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに包まれた。

(マルコの福音書5章35〜42節)

このように、ペテロとヨハネは、イエス様が死人をよみがえらせるところを見て、イエ

ス様が人間にはとうていできない力、死から人をよみがえらせる力、すなわち、神の力を
持つ方であることを体験しました。

第三の体験は、イエス様が悲しみ、恐れ、もだえながら、父なる神に祈っておられるの
を見たことです。

ゲッセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈る間、
ここにすわっていなさい。」そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて
行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。そして彼らに言われた。「わたし
は悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」

(マルコの福音書14章32〜34節)

ゲッセマネの祈りとして有名な祈りをなさる直前に、イエス様は彼らにこのようにおっ
しゃいました。それは、人としてのイエス様が、私たちの身代わりになって神様から罰せ
られることが、いかに恐ろしく、苦しいことであるかを自ら体験してください。だからであ
ります。人の子としてのイエス様の悲しみ、恐怖、苦しみをペテロとヨハネは見たのであ
ります。これらの強烈な体験はペテロとヨハネの信仰にとって、どれほど大きな力になっ
たでしょうか。

しかし、ふたりが最も強烈な体験をしたのは、彼らが復活のイエス様に会ったことでした。

夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」彼らは答えた。「はい。ありません。」イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」そこで、彼らは網をおろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかった。そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。「主です。」すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸だったので、上着をまとって、湖に飛び込んだ。

(ヨハネの福音書21章4〜7節)

これは彼らが復活されたイエス様に会ったときの情景です。彼らは、自分たちの愛するイエス様が十字架で死に、墓に葬られてしまったので、失意の心を抱きながら、ふたたび魚を取る漁師に戻っていました。漁に出ましたが何も取れませんでした。そのとき、復活のイエス様に会ったのです。

復活の主イエスとの出会いの体験を通して、
イエスとともにいる確信を得る

ふたりは、復活のイエス様との出会いの体験を通して、これからはイエス様がいつもとも
もにいてくださる、という確信を持ちました。復活のイエス様にお会いしたときに、まず
何が彼らの頭に浮かんだでしょうか。それは、最初のイエス様との出会いのときに、イエ
ス様がおっしゃった「魚を漁るのではなく、人を漁る漁師になりなさい。」ということば
ではなかったでしょうか。そして、ふたりはこの復活のイエス様と出会って、主が自分た
ちとともにおられることを確信し、それによって、彼らの弱った霊に、勇気と力が与えら
れて、ふたたび人を漁る漁師の仕事に帰ったのです。

イエス様の弟子の資格とは何でしょうか。それはこのふたりのように、「主を見た」者
であります。復活の主と出会って、その証しをする者であります。ヨハネは次のように言っ
ています。

初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手で
さわったもの、すなわち、いのちのことばについて、——このいのちが現われ、

私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。――

(ヨハネの手紙第一 1章1〜2節)

ここでも、「私は見たので、そのあかしをし、……。」と言っています。彼はまた、

私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。

(ヨハネの手紙第一 4章14節)

とも言っています。イエス・キリストの弟子の資格は、このように、主に出会った者と与えられます。

キリスト者も復活のキリストとの出会いにより、
イエスがともにおられる確信を得る

イエス様の弟子は、ペテロやヨハネのように、人となられたイエス様に直接仕えた者に限りません。霊の目でイエス様を見た私たちキリスト者は、霊の目で復活のイエス様に出会った私たちキリスト者は、無学で普通の人であり、聖書の知識はなくても、だれでもイ

イエスの弟子の資格があります。単に人の知恵で読んだ聖書の知識は、むしろ福音の妨げになることがあります。唯必要なのは、イエス様がともにいてくださることであり、私たちはイエス様がともにいてくださることによって、イエス様から力と知恵をいただいて、はじめて大胆に福音を証しすることができます。イエス様は、

どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。

(ルカの福音書21章15節)

と、私たちキリスト者に約束してくださっているのであります。何と心強いではありませんか。

イエスとともにいれば、御霊によって力と知恵が与えられる

パウロは、

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

(エペソ人への手紙1章17節)

とイエス様を信じる私たちのために祈っていますが、父なる神様は、私たちキリスト者が無学で普通の人であっても、御霊を遣わしてくださり、御霊の啓示によって神様のみこころと奥義を知る知識を与えてくださいます。これについて、パウロは、

みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。ある人には御霊によって知恵のことが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことが与えられ、……。

(コリント人への手紙第一12章7〜8節)

と書いています。このように、復活のイエス様との出会いの体験を通してイエス様の弟子とされた多くの人たちは、御霊によって与えられる知恵を通してのみ、神様の奥義を知るのであり、神学や聖書の研究によって知ったのではなかったのです。たとい人が自分の知識で、神のことは宣べ伝えても、そこには主がともにおられるという喜びもなく、聖霊が働かれる余地ありませんから、聞く人々の霊を揺り動かすことはできません。パウロは、

十字架のことは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちに、神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなくする。」知者はどこにいるのですか。学者はど

ここにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。

(コリント人への手紙第一一章18〜24節)

と言っていますが、このように、イエス様の知恵、神の知恵をいただくことによって、はじめ私たちは神様の奥義について、人に正しく説き明かすことができるのであります。そのために、イエス様は助け主なる御霊を私たちに与えてくださったのです。

わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。

世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。

(ヨハネの福音書14章16〜17節)

助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

(ヨハネの福音書14章26節)

パウロは御霊の助けによって宣教がなされることの重要性について次のように言っています。

いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生ま

六 ふたりはイエスとともにいた

れながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらには愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

(コリント人への手紙第一二章11〜14節)

私たちキリスト者も、ペテロやヨハネ同様、無学で普通の人間であります。けれども、私たちは恐れたり、萎縮いしやくする必要はまったくありません。私たちがペテロやヨハネと同じようにイエス様に心から信頼するときに、聖霊が、すなわち、肉の目には見えないイエス様がともにいてくださって、神様のみこころを私たちキリスト者の霊に啓示してくださり、語るべきこと、証しすべきことをすべて教えてくださり、助けてくださるからです。

このように、福音伝道に必要な力も知恵もすべて、ともにいてくださるイエス様が御霊を通して私たちキリスト者に与えてくださっていることに心から感謝して、何も知らずに滅びへの道を歩んでいる人たちに、ひとりでも多くイエス様を大胆に証しできるように祈りたいと思います。

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。

(ヨハネの黙示録3章15〜16節)

今日はイエス様のおっしゃった、このみことばをいっしょに考えてみたいと思います。イエス様はここで「あなたはなまぬるい、むしろ、熱いか冷たいかであってほしい。」とおっしゃっています。これは、イエス様を信じている者、すなわちキリスト者に対しておっしゃっているみことばです。そこで今日は、信仰における熱心とはどんなものであろうか、ということについて考えたいと思います。

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

信仰における間違った熱心

と申しますのは、うっかりすると信仰に熱心であるという意味を取り違えて、間違った熱心さに陥る危険があるからです。かつての私を含めて、キリスト者の中には、熱心な信仰というのを、教会に対する奉仕、あるいは教会活動に熱心というように取り違えている方々が少なくありません。しかし、それは、目に見える行ないという形で熱心に教会に奉仕することが信仰的なことだと思っていたり、またそれによって自分の信仰の熱心さを現わしたいという自分自身の思いや、回りの人たちにも、そのような自分を見てもらい、熱心さを認めてもらいたいという思いが、潜在的にあるからではないでしょうか。そうなる、行ないに熱心であることによって自分を誇ることもなくなってしまふのです。これは見当違いの熱心さであります。

また、個人ばかりでなく、教会そのものが信仰の熱心さを別の形で現わしているところもあります。それは異言やいやしの信仰を熱心に行なっている教会であり、これも、みことばの真意を取り違えた誤った信仰の熱心さであります。パウロは行ないを誇るこのようなこと、次のように言っています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです。

(エペソ人への手紙2章8〜9節)

信仰における正しい熱心

では、正しい信仰の熱心さとは、どのようなものを言うのでしょうか。信仰においては、何に熱心であるべきなのでしょう。イエス様が私たちに「あなたの信仰は熱くあってほしい。」と望んでおられる信仰の熱心とは、どういうものなのでしょう。それをこれからごいっしょに考えてみることにしたいと思います。

一、天にあるものを求めるのに熱心

まず第一に、私たちは天にあるものを求めることに熱心でなければならぬと思います。パウロは、次のように言っています。

もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを

求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

(コロサイ人への手紙3章1〜2節)

私たちはイエス様とともに十字架につけられ、イエス様とともによみがえらされた者であります。そうであれば、地上のものを思わず、上にあるもの、すなわち、天にあるものを求めなさい、そこにはイエス様がおられるからです、とパウロは言っているのです。私たちは、今までは地上に属する者、サタンの支配下に置かれていた者でありました。そのときは、私たちの求めるものは、百パーセント地上のものであったのです。

けれども、すでに私たちはイエス様を信じる信仰によって、天の国籍を持つ者、天に属する者とされました。ですから、この地上に肉体が置かれていても、心は天にあるはずであります。したがって、求めるものは、すべて天的なものを熱心に求めることが、キリスト者の信仰の熱心さではないでしょうか。

兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目

標を目ざして一心に走っているのです。ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。

(ピリピ人への手紙3章13〜15節)

このようにパウロは、成人である者はみな、神様の栄冠を得るために、地上のものには目を留めず、ひたむきに天に目を向けて信仰の馳せ場を走ろうと言っています。成人とは信仰における成人、霊的な成人という意味であります。

私たちもイエス様を信じたときは、生まれたばかりの霊の赤ちゃん、新生児であるわけですけれども、イエス様がみことばの乳によって私たちを育み、育ててくださいます。ですから、私たちがいつも霊的な飢え渴きをおぼえて、みことばを食べ続けるならば、それによって私たちはだんだんに霊的に成長して、成人に達して行きます。イエス様はそのことを私たちに期待して育ててくださるのです。

二、罪の悔い改めに熱心

二番目に、私たちは罪の悔い改めに、熱心でなければならぬということです。

もちろん、罪の悔い改めはイエス様を信じるときに、なされなければならない非常に大

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

切なことです。もし自分の罪がわからず、その結果、罪の悔い改めもないままにイエス様を信じるとすれば、これはたいへん困ったことになります。なぜなら、それではイエス様の十字架の意味がわからないからです。かつては私も、水のバプテスマを受けていたのにもかかわらず、自分の罪がどのようなものかわからなかったために、長い間イエス様の死と自分との関係がはっきりしていませんでした。そのために、私の信仰はまったく無きに等しい、なまぬるいものになっていたのです。ですから、イエス様の十字架の死が、ほかならぬ自分自身のために必要であったということがわかるためには、まず自分の罪がどんなに大きなものであるかを知る必要があります。それがはっきりわかりさえすれば、信じるときに罪の悔い改めに熱心にならざるを得ないでしょう。

ではイエス様を信じた後には、もう悔い改めは必要ないかというところ、そんなことはありません。なぜなら、イエス様を信じた者は天に属する者とはされていますが、地上にあつて生かされている間は、なおサタンの攻撃、誘惑が非常に強く、そのために罪を犯してしまふことがあります。この世の支配を許されているサタンは、地上に置かれた神の子どもである私たちキリスト者を、何とかして正しい信仰から引き離し墮落させよう、いろいろな誘惑の手を使って罪を犯させようとするのです。

悲しいことに、地上に置かれている私たちの肉の部分は弱く、そのために、何かあるとすぐに動揺して、サタンの誘いにかかり、罪を犯してしまうのが私たちなのです。私自身も、それをたびたび体験しました。しかし、幸いなことに私たちは、そのようなときにも、主イエス様が弟子のシモン・ペテロのために祈られたように、ご自分を信じるすべての者のためにも、とりなしの祈りをしてくださるといふ確信がありますから、たとえ罪を犯してもすぐに悔い改めて主に立ち返ることができ、また、ふたたび主からの平安をいただくことができるのです。

シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。

(ルカの福音書22章31〜32節)

また私たちは、ともすれば、イエス様の十字架の贖いが自分の過去、現在、未来のすべての罪を赦すものであるという恵みに甘えて、かえって罪を甘く見て、罪を犯すことに痛みや悲しみをおぼえることが少なくなってしまうのではないのでしょうか。もしそうであれば、たいへんに恐ろしいことであります。しかし、主イエスはそのような者に対し

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

ても、愛をもって次のように戒めてくださるのです。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

(ヨハネの黙示録3章19節)

イエス様は、ご自分のいのちをもって罪から救い出された私たちを心から愛して下さっているがゆえに、私たちを叱ったり、懲らしめたりなさいます。いろいろな試練は、私たちを霊的に成長させようというイエス様の愛によって与えられるものです。ですから、私たちが罪を犯したことに気づいたときには、信じたとき以上の熱心さをもって、心から悔い改めて主に立ち返らなければなりません。この悔い改めが、私たちの信仰の歩みに大切なことであると、主は預言者ヨエルの口を通して、次のように言っておられます。

「しかし、今、——主の御告げ。——心を尽くし、断食と、涙と、嘆きとをもって、わたしに立ち返れ。」あなたがたの着物ではなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるからだ。

(ヨエル書2章12〜13節)

三、主に信頼することに熱心

三番目に、私たちは主に信頼することにおいて熱心でなければなりません。

ユダの国にダニエルという貴族の若者がおりました。ユダは当時の大国バビロニヤと戦って敗北し、王をはじめとして多くの国民が捕囚としてバビロニヤに連れて来られました。ダニエルもその中のひとりでしたが、バビロニヤの王ダリヨスに信頼されて、捕囚の身でありながら国政に参与するほどの身分になっていました。

ところが、これを心よく思わない他の大臣たちは、ダニエルを抹殺しようと計りました。彼らはダニエルが律法を守って、主なる神様以外には礼拝しないのを知って、ダリヨス王に、「王以外のものを拜んではならない。もし、これを破れば獅子の穴に投げ込まれる。」という禁令を出させました。それでもダニエルは唯一の主なる神に祈っていたので、とうとう獅子の穴に投げ込まれてしまいました。それでも、彼は主なる神に信頼していました。王は夜明けに日が輝き出すとすぐ、獅子の穴へ急いで行った。その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

すると、ダニエルは王に答えた。「王さま。永遠に生きられますように。私の神は御使いを送り、獅子の口をふさいでくださったので、獅子は私に何の害も加えませんでした。それは私に罪のないことが神の前に認められたからです。王よ。私はあなたにも、何も悪いことをしていません。」そこで王は非常に喜び、ダニエルをその穴から出せと命じた。ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。

(ダニエル書6章19〜23節)

彼は獅子の穴の中に入れられても、すなわち、死に直面しても、神様を信頼し続けました。ダニエルの神様に対する、この信頼の熱心は、私たちの手本であります。また、ダビデは次のように言っています。

恐れのある日に、私は、あなたに信頼します。神にあつて、私はみことばを、ほめたたえます。私は神に信頼し、何も恐れません。肉なる者が、私に何をなしえましょう。

(詩篇56篇3〜4節)

私たちは、日頃は主に信頼すると言ったり、思ったりしますが、ダニエルやデビデのよ

うに、恐れのあるときにこそ、主に信頼することに熱心でなくてはならないのではないでしょうか。

四、主に対する従順に熱心

四番目に、私たちは、主に対する従順さにおいて、熱心でなければなりません。

ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。」

(マルコの福音書10章28〜30節)

このペテロのように言うことは、私たちにはなかなかできません。何もかも捨ててイエス様に従うという、ペテロのような従順さを持つことは、たいへんに難しいことです。けれどもイエス様は、「あなたがたに、この世でわたしに従うために受ける迫害に代わって、後の世では永遠のいのちを与えます。」と約束しておられるのです。

私たちは、このすばらしいイエス様の約束に心から感謝して、イエス様に従順であることに熱心でありたいと切に願う者です。しかし、そのためには、意識して、怠惰な自分を叱咤しなければならぬのではないのでしょうか。パウロは次のように言っています。

私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えるおきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

(コリント人への手紙第一九章27節)

パウロは、まことにすぐれて偉大な伝道者であります。その彼ですら、自分の肉体を打ち叩いているのです。その理由について、彼は、「人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないため」と言っています。この言葉を、私たちは自分の身に当てはめて、深く自分の内側を吟味しなければならないのではないのでしょうか。

五、イエス・キリストを証しすることに熱心

五番目に、私たちはイエス・キリストを証しすることにおいて、熱心でなければなりません。

ペテロとヨハネら使徒たちは、祭司やユダヤ人の指導者たちから迫害されてもイエス様

を証しし続けました。

そこで彼らを呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」

(使徒の働き4章18〜20節)

「私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」宣べ伝えることに、彼らは何という熱心でありましょうか。

聖歌五七八番に、「滅び行くだましいを重荷とはなさずや。なにゆえに主の救い、人々に語らぬ。用い給え、わが主よ。用い給え、われをも。み恵みを取り次ぐに、通り良き管として。」という歌詞があります。イエス様を証しすることの熱心さが、歌詞の中にあふれているすばらしい聖歌であります。また、パウロは次のように言っています。

神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

たしかに、私たちは臆病おくびょうであり、弱い者であります。しかし、私たちが主からいただきたい力と愛と慎みの霊によって、弱いものである私たちが強められて、熱心に主を証しすることを、イエス様は望んでおられるのです。

六、主のために苦しみ喜ぶことに熱心

六番目に、私たちは主のために苦しむことにおいて熱心であることが必要です。

イエス様は、私たちを滅びに至る罪から救い出してください。どんなに苦しめられたでしょうか。それは、想像に絶するものであったと思います。イエス様はこうおっしゃっています。

わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。

(ルカの福音書12章50節)

イエス様は神であられます。神様は人間の苦しみを味わうことはおできになりません。ですから、イエス様は神でありながら人となって、私たち人間の苦しみを味わってください

たわけであります。しかも、イエス様の十字架の苦しみというのは、本来は私たち自身が当然受けなければならない苦しみを代わりに負ってくださったものなのです。そのイエス様のために、私たちは、どれほど熱心に苦しむことができるでしょうか。パウロは、こう言っています。

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。

(ピリピ人への手紙1章29節)

使徒たちは、イエス様を宣べ伝えることによって迫害を受け、そのために恥かしめを受け、苦しみを味わわなければなりませんでしたが、そのとき、彼らは悲しむのではなく、反対に喜んだのであります。

使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言いだしたうえで釈放した。そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。

(使徒の働き5章40〜41節)

私たちが、イエス様の証しをするときに、あるいは、イエス様の側にはっきりと立つと

きに、使徒たちには、はるかに及びませんが、いろいろとつらい、不快な目に会うという体験をします。そのときに、私たちも使徒たちのように、「御名のために恥かしめられるに値する者とされた。」という資格が自分にも与えられたからこそ、このような苦しみに会っているのだというように喜べる者になりたいと切に思います。

七、主のしもべのわざに努めることに熱心

七番目に、私たちは主のしもべのわざに努めることに、熱心であるべきであります。聖書の中でイエス様は、忠実なしもべと怠け者のしもべのたとえ話しをしておられます。

「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。五タラント預かった者は、すぐに行つて、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。さて、よほどたつてか

ら、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんのお物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ。』二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんのお物を任せよう。主人の喜びとともに喜んでくれ。』ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蔭かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蔭かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべき

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

だった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さない。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」

(マタイの福音書25章14〜30節)

神様からの賜物を活用する者は神様に喜ばれますが、怠けてそのままほったらかしにしていた者は、神様から懲らしめを受ける、ということのたとえであります。私たちは主からひとりひとり、その人に応じた賜物を与えられています。その賜物を私たちはどうしているでしょうか。多くの賜物が与えられているか、少ない賜物が与えられているかを、主は問題にさいしません。それぞれが主から与えられた賜物を、主のためにどのくらい活用しているかということ、主はご覧になるのです。それが、主に忠実であるかどうかの物差しであります。

私たちに与えられた賜物とは何でしょうか。健康、知恵、時間、金銭などもそうです。しかし、それらだけではなく、主から与えられた賜物には、霊的なものがあります。それ

は、御霊の実であります。御霊の実は次のようなものであるとパウロは言っています。

御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

(ガラテヤ人への手紙5章22～23節)

これらもすべて主から来たものです。主から来たものを、主のために活用することが、忠実なしもべの熱心さの証しです。このように、すべてはそれらを用いて主のご栄光を現わすために主からいただいたものですから、私たちは、少しでも主のご栄光が現わされることを祈りながら、主からいただいたすべての賜物を用いて、しもべとしてのわざに熱心でありたいと思います。

主を愛することに熱心

以上、信仰における正しい熱心について七つ挙げましたが、これをまとめますと、私たちは主を愛することに熱心でなければならぬ、ということに尽きます。私たちの信仰の熱心の証しは、主に對する愛に熱心であることに尽きるからであります。

ひとりの律法学者が、神様の命令のうちで何が一番大切ですかとイエス様にお尋ねしたとき、イエス様は次のように答えられました。

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」

(マルコの福音書12章29〜31節)

またイエス様は次のようにおっしゃっています。

イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。」

(ヨハネの福音書8章42節)

私たちは、イエス・キリストを信じる信仰によって、生ける唯一の主なる神様を父と呼ぶことができるように生まれ代わらせていただきました。神の子ども、キリストのものとされた私たちは、父なる神様ならびに御子なる神イエス様から、どんなに愛されているかを良く知っているはずであります。しかし、その私たちは、私たちが熱心に愛して下さっている神様、イエス様の愛に比べて、どれほど神様やイエス様を愛するのに熱心でありましょうか。

主を愛することに熱心であるということは、主が言われたように、主の命令を守り行なうのに熱心ということであります。しかし、イエス様が、

もしあなたがたがわたしを愛するならば、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで
す。

(ヨハネの福音書14章15節)

とおっしゃっているのは、私たちが口では主を愛していると言いながら、主の命令に従うことに熱心ではないことを指摘しておられるのではないでしょうか。

さらにイエス様は、次のようにおっしゃっています。

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。もし、あなたがたがわたしの戒めを守るならば、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにある、あなたがたの喜びが満たされるためです。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

七 信仰における正しい熱心、間違った熱心

私たちは、このイエス様のみこころに従って、私たちに注がれている溢れるばかりの主の愛を、いつも熱い思いで感謝し、満たされたその愛を隣人に持ち運ぶことができるように、心から祈りたいと思います。それが主を愛することに熱心であり、ひいては信仰における正しい熱心な姿勢だからであります。

(ヨハネの福音書15章9〜12節)

八 「わたしもあなたがたを遣わします。」

イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

(ヨハネの福音書20章21節)

ひとりひとりが福音を伝えることの重要性

今日は、聖書のこのみことばから、キリスト者ひとりひとりに与えられている福音伝道の重要性について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

創造主なる神がご自分の御子イエス様をこの世にお遣わしになったのは、失われたたましいを尋ね出し救うためでした。神様は、失われた者を、だれであれ、どこであれ、尋ね出して救うために、ご自分のひとり子イエス・キリストをこの世に遣わされたのであります。

す。そして主イエス様は、それと同じように弟子たちを、救いの福音を宣べ伝えるために、世界の各地に派遣されたのです。福音はこうして世界中に広がって行きました。私たちも、その恵みに与った者のひとりであります。そして、この福音伝道の使命は、かつて弟子たちに主が与えられたように、今、救われて主のしもべとされた、すべての者に与えられているのであります。

主イエスの救いを伝える相手は、それがだれであっても、また、その場所がどこであっても、まったく関係はありません。神様から迷い出たたましいを尋ね出して、福音を伝えるようにと、主イエス様はご自分のいのちの代価を払って、ご自分のものとしてくださったすべてのキリスト者に命じておられるのであります。キリスト者の中には、福音伝道の使命は、選ばれた特定の人々に限って与えられたものと考えている方がいますが、そのようなことは、聖書のどこにも書かれてはいません。福音伝道は、主イエス様に救われたすべての者に与えられた使命なのです。

福音の使者の手本

けれども、主イエス様に救われ、主のものとされた私たちは、どのようにして失われた

人々を探し出し、どのように福音を伝えたらよいのでしょうか。自分にはその知恵も力もなく、また方法もわかりません。しかし、聖書にはその良い手本があります。それがピリポの伝道です。これからピリポの伝道の例を通して、キリスト者ひとりひとりの福音伝道のあり方について考えてみたいと思います。

主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」（このガザは今、荒れ果てている。）そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、いま帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」と言った。すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう。」と言った。そして、馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者

八 「わたしもあなたがたを遣わします。」

の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかつた。彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。「宦官はピリポに向かつて言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私バプテスマを受けると、何かさしつかえがあるでしょうか。」そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。水から上がったとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。

(使徒の働き8章26〜39節)

この、ピリポの宦官に対する伝道には、福音を宣べ伝える者に大切な要素が七つ含まれていると思います。

福音の使者に大切な要素

一、主の命令に対する従順

まず第一に、ピリポは主の命令に対して従順に従いました。

主の使いがピリポに向かってこう言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」そこで、彼は立って出かけた。

(使徒の働き 8 章 26 ～ 27 節)

当時、ピリポはサマリヤの町で多くの人々にキリストを宣べ伝えており、その成果は次のように上がっていました。

ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。群衆はピリポの話聞き、その行なっていたしるしを見て、みなそろって、彼の語ることに耳を傾けた。

(使徒の働き 8 章 5 ～ 6 節)

そのときに、主の命令が御使いによって告げられたのです。地図を見ると、サマリヤか

ら南のエルサレムまでは約五十キロあります。そこからさらに南西に八十キロ行くとガザの町に至ります。簡単に行ける距離ではありません。しかも、なぜ実りつつあるサマリヤでの伝道を捨てて、ガザに行かなければならないのか、彼にはその理由も目的も知らされませんでした。しかし、ピリポは躊躇ちゅうちゆしたり、迷ったりせず、また、そのために自分が払わなければならぬ犠牲も顧みずに、主の命令に従順に従って、ただちに出発したのです。

ピリポにとっては、多くの人々に対する伝道の実りを自分の目で見ることよりも、みこころに従うほうがはるかに大切だったからであります。福音を宣べ伝える者は、このピリポのように、主のみこころに敏感でありたいものです。そして、主のみこころが明らかであることが示されたときには、ただちに、これに従順に従う用意をしなければならぬと思います。

二、宣べ伝えることに熱心

第二に、ピリポは主を宣べ伝えることに熱心でした。

御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえた。

ピリポは、宦官といっしょに行くように御霊に命じられたときに、「走って」行きました。この「走って」という言葉は、主のみこころを行おうという、彼の熱意、熱心をよく現わしていると思います。もし、ピリポがぐずぐずしていて宦官のところに行くのが遅れたならば、宦官はイエス・キリストがこの世においでのことを預言している、このイザヤ書五十三章をわからぬままに読み終わって、どんどん先に読み進んでしまい、イエス・キリストを信じ救われる機会を逸したかも知れません。福音を宣べ伝える者は、ピリポのように宣べ伝える機会を逃さないことに熱心でなければならぬのではないのでしょうか。

三、失われた者に対するあわれみ

第三に、ピリポは失われた者に対するあわれみの心を持っていました。

ピリポが宦官に近づいたとき、ピリポの心はどんなにか宦官に対するあわれみに満ちていたことでしょうか。御霊の助けによって、何とかこの失われたたましいが救いに導かれるように、という切なる祈りがピリポの心に満ちていたに違いありません。主のために働く者は、失われていた自分が救われたのは、主の大きなあわれみによるものであったことを

八 「わたしもあなたがたを遣わします。」

心から感謝し、今度は、自分が失われたたましいに対して、深い同情の心をもって交わることが必要です。パウロはこれについて次のように言っています。

もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです。神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださいましたのです。

(ローマ人への手紙 9 章 22 ～ 24 節)

また主なる神様は、失なわれたたましいに対して、永遠の愛をもってあわれむ、とおっしゃっています。

「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てたが、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖う主は仰せられる。

したがって、福音を宣べ伝える者は、宣べ伝える相手の人がだれであれ、主がその人をあわれんでおられるということに、深く思いを致さなければならぬと思います。

四、機会をとらえることの適切さ

第四に、ピリポは御霊の導きによって主イエス様を宣べ伝える機会を、じょうずにとらえました。

「あなたは、読んでいることが、わかりますか。」

(使徒の働き8章30節)

ピリポは、宦官が聖書のどこを読んでいるのかを知って、とっさにこのように宦官に話しかけました。それは宦官が読んでいた箇所こそ、聖書の最も重要なイエス・キリストについての預言であり、そのことを説き明かす絶好の機会だと御霊によって判断したからです。ここでもし、宦官と近づきになるための余計な会話をしていたら、イエス様を伝える機会は失われていたでしょう。ピリポのように、機会をじょうずにとらえ、適切に語りかけることが、福音伝道にたいへん大切なのではないのでしょうか。

五、みことばに関する知恵

第五に、ピリポにはみことばについての知恵が与えられていました。

彼が読んでいた聖書の個所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかつた。彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝え

(使徒の働き 8 章 32 ～ 35 節)

当時のユダヤ人は、これはイザヤを指していると信じていました。しかし、宦官はそれが正しいのかどうか、わからずに迷っていたのです。ピリポは御霊の導きによって、聖書を正しく知る知恵を与えられていましたので、この箇所が主イエス・キリストを預言して

いることを宦官に説き明かすことができましたのです。ピリポのように、私たちも福音伝道のために、御霊によって正しくみことばを知ることができるように祈る必要があります。

六、大胆さと機転

第六に、ピリポは大胆かつ機敏に行動しました。

ピリポに導かれた宦官は、罪の赦しがイエス・キリストを信じることによって得られることがわかり、ただちにイエス様を信じ受け入れました。そして水のあるところに来たとき、御霊の導きによって宦官は、「私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるのでしょうか。」とピリポに積極的に尋ねました。ピリポはぼんやりしていませんでした。ピリポは宦官がイエス様を救い主として受け入れたこと、すなわち、すでに宦官が御霊のバプテスマを受けたことを知り、次の段階としての水のバプテスマを受けるのにふさわしく整えられたと判断して、すぐにこの希望を入れて、宦官に水のバプテスマを授けました。よく、水のバプテスマを受けなければ、信じたことにはならないと考える人がいますが、それは正しくありません。イエス様を自分の救い主と心から信じていることができるのは、宦

八 「わたしもあなたがたを遣わします。」

官がイエス様を信じ受け入れたときのように、その人に聖霊によるバプテスマが与えられたからであります。水のバプテスマは、イエス様を信じた信仰を公に証しすることであり、また、イエス・キリストの十字架と復活のみわざによって、新しく生れ代わった者として主イエス様に、しもべとして従う誓いでもあるのです。ペテロは次のように言っています。

バプテスマは肉体の汚れを取り除くものではなく、正しい良心の神への誓いであり、……。

(ペテロの手紙第一三章21節)

福音を伝える者は、ピリポのように導く相手の人の霊の状態に心を配り、機会を逸することなく大胆に、かつ機敏に導くことができるように祈る必要があるのではないでしょうか。

七、最も大切な御霊の導き

第七に、ピリポには御霊の導きがありました。

御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい。」と言われた。

(使徒の働き8章29節)

復活なさったイエス様が天に上られる直前に、弟子たちに次のようにおっしゃいました。

「聖霊があなたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

(使徒の働き1章8節)

ピリポもそのひとりとして、御霊によって導かれ、教えられ、力を与えられたのです。もし、彼が自分の知恵や力に頼ったならば、宦官の心を捕えることはできなかったでしょう。福音を宣べ伝えるひとりひとは、自分の力や考えによってではなく、ピリポのように御霊に拠り頼むことを絶えず祈り求めることが最も大切であると思います。

イエス・キリストに救われた者は、この方を証しせざるを得ない

私たちは、キリスト・イエスに、ご自身の尊いいのちの代価を払って買い取っていただき、キリストのものとされた者であります。ですから、私たちは、罪からの救いはこの方以外にはない、ということがよくわかっています。ペテロとヨハネは次のように証しをしています。

八 「わたしもあなたがたを遣わします。」

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

(使徒の働き 4章12節)

また私たちは、イエス様がこの世に來られた目的が、すべての人の身代わりに十字架におかかりになるためであったことも知っています。ヨハネは次のように言っています。

この方こそ、私たちの罪のための、—— 私たちの罪だけでなく全世界のための、——
—— なだめの供え物なのです。

(ヨハネの手紙第一 2章2節)

イエス様によって、滅びの罪から救い出されたということに、大きな喜びと感謝を持つ者は、この方を証したい、イエス様を宣べ伝えたいと心から願うようになるのではないでしょう。もし、先にイエス様に救われ、イエス様がどなたで、何をしてくださった方かをよく知っている者が、そのイエス様を世の人に紹介しなければ、ほかにだれがイエス様を伝えるのでしょうか。これについて、パウロは次のように言っています。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。しかし、信じたこと

のない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」

(ローマ人への手紙10章13～15節)

エルサレムの初代教会がユダヤ人に迫害されたとき、使徒たち以外の信者たちは地方に散らされました。彼らはそこで「良いことの知らせ」すなわち、福音を宣べ伝えて町々を巡り歩きました。すでに、この時代から福音伝道は一般の信者によって行なわれていたのです。

その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。

(使徒の働き8章1節)

散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。

(使徒の働き8章4節)

八 「わたしもあなたがたを遣わします。」

福音を宣べ伝えることについては、今日も当時とまったく変わりません。いや、終わりの日がいよいよ間近に迫っている今日、主イエス様は、ひとりひとりのキリスト者に対して、「あなたを今、福音を宣べ伝えるために遣わします。」とおっしゃっているのではないのでしょうか。

九 信仰の確信

信仰は望んでいる事からを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

(ヘブル人への手紙11章1節)

信仰の確信とは

今日は、信仰の確信について、ごいっしょに考えてみたいと思います。冒頭のみことばは、信仰とはどういうものかを、まことに端的に言い表わしています。目に見えないものを確信させるもの、望んでいることがらを保証するものが信仰であるということです。たしかに、信仰は目に見えません。しかし、目に見えないものに信頼すること、これがまさに信仰の神髄しんぐわいであります。私たちにとって、目に見えないものに信頼するのは、なかなか難しいことです。日頃私たちの生活では、いつも目に見えるものに頼って生きています

九 信仰の確信

から、目に見えないものに頼るということは、それこそ頼りないと感じるのは当然かも知れません。しかし、信仰は、まさに目に見えないものであります。けれども、信仰は肉眼でこそ見えませんが、霊の目が開かれればはっきりと見る、あるいははっきりと知ることができます。そして、霊の目で見ることができたときに、はじめて信仰に確信が与えられるのです。

自分の信仰に、確信がないという人は少なくありません。しかし、もし確信のない信仰であれば、信仰から得られる平安、喜び、希望などの、すばらしい実を味わうことができないばかりか、私たちの生きている日々には、毎日いろいろなことが起こりますから、そのたびに波風に翻弄ほんろうされて、焦ったり、あわてたり、恐れたり、失望したりして、信仰はどこへやら、という悲しい状態になってしまいます。信仰に確信があるかないかによって、ここにまことに大きな差が出てきます。

そこで、これから信仰の確信とはどういうものか、また、いったいどうしたら信仰に確信が持てるか、ということについて考えてみたいと思います。

まず、信仰の確信とは、具体的にどのようなものなのでしょう。

一、罪の赦しについての確信

一番目は、罪の赦しについての確信であります。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

(イザヤ書43章25節)

私たちが造ってくださった神様は、預言者イザヤの口を通して、このようにご自分を信じた者に約束してくださっています。この約束を神様は、何によって私たちにしてくださいのでしょうか。それは、私たちの罪を赦すために遣わされた御子イエス様の十字架による罪の贖いのみわざによってであります。パウロは次のように言っています。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰された

九 信仰の確信

のです。

(ローマ人への手紙8章1〜3節)

この確信は、神の御子イエス様の十字架の死が自分の罪を贖うためであったということ、心から信じて受け入れた者だけに与えられるものであります。イエス・キリストの十字架の死は、人の罪を贖うためであったということを、唯知っているだけでは、罪が赦されたとは言えません。まして罪の赦しの確信を持てるはずはありません。

自分の中に、自己中心な考えやわがままな思い、また、どうしても取り去ることのできない悪い心があることを認め、それを素直に神様の前に告白し、「イエス様の十字架の上での死は、ほかならぬ罪のかたまりのような、この私自身のためであった。」と、自分との関わりにおいてはっきりとした悔い改めをもって受け入れなければ、イエス様を信じていることにはなりません。そうしたときに、はじめて人はほんとうに心の解放を体験します。そして碎かれた悔いた心を持って、イエス様の十字架の救いを自分のものとして心から感謝し受け入れたときに、はじめて人は自分の意志ではっきりと信仰告白をすることができ、ます。信仰告白とは、聖書にある通り、

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

(ローマ人への手紙10章10節)

ということですが、もちろん他人に強制されて、あるいは勧められて、いやいやながら、あるいはお義理でイエス様を信じます、と言っても、それはほんとうの信仰告白とは言えません。自由な自分の意志によってなされたときに、はじめて罪の赦しの確信へと導かれて行くのです。

二、神の子どもとされた確信

二番目は、神の子どもとされたという確信であります。

パウロは次のように言っています。

神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

(エペソ人への手紙1章4〜5節)

このことも私たち人間の頭では、とうてい理解し得ないことであります。私たちには、

九 信仰の確信

せいぜい、この世の道を滅びに向かって歩んでいるときに、神様がその私たちをあわれんで救ってくださった、という程度のことしか考えられません。しかし、このみことばによりますと、神様は私たちがこの世に生まれるはるか前、しかも、まだ世界が創造される前から私たちを愛して、ご自分の子にしようと、イエス様の救いのうちに選んでいてくださったというのです。

この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

(ヨハネの福音書一章12節)

このみことばを幼な子のように信じて、「私は、ただ神様が遣わしてくださいとくださった神の御子イエス・キリストを信じたことによって、恵みのゆえに神の子どもとされたのだ。」という確信を持つことができなければ幸いです。

三、永遠のいのちを持っているという確信

三番目は、私たちが永遠のいのちを持っているということの確信であります。

ヨハネは次のように言っています。

そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

(ヨハネの手紙第一5章11〜13節)

イエス様は、

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。

(ヨハネの福音書11章25〜26節)

とおっしゃいました。そして、十字架の死後三日目に復活されて、永遠のいのちを持っておられることをご自分で証明されました。私たちが、「自分は、この御子イエス様のうちにある永遠のいのちを与えられたから、イエス様を信じる自分の中にイエス様が住んでくださっている。だからイエス様において自分も永遠のいのちに与かっているのだ。」ということを、これらのみことばから確信することができていれば幸いです。

四、キリストとの結びつきについての確信

四番目は、キリストとの結びつきについての確信であります。

パウロは次のように証しています。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ人への手紙 8 章 38 ～ 39 節)

パウロはこのように、どんな力をもってしても自分をイエス様から引き離すことはできないと、イエス様との強い結びつきをはっきりと証しています。これが彼の確信であり、また同時にキリスト者の確信でもあります。このことは、イエス様ご自身も、

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

(へブル人への手紙 13 章 5 節)

と、はっきり約束しておられます。私たちが、イエス様のみことばを全面的に信頼し、こ

のように、「イエス様と自分との結びつきは、このイエス様の約束に基づいているのだから、どんなことがあっても決してイエス様から離れることはない。」という確信を持つことができれば幸いです。

五、自分の祈りが成就するという確信

五番目は、自分の祈りが成就するという確信であります。

ヨハネは次のように言っています。

何事でも神のみどころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので。

(ヨハネの手紙第一5章14〜15節)

イエス様に信頼する者の祈りを、主は必ず聞いてくださいます。もし、祈りの答えが与えられないときは、私たちの祈りがみどころにかなわないものであった場合か、あるいは「今は答えるときではない、わたしは最善のときにあなたに答えよう。」と考えておられるかあります。みどころにかなわぬ祈りとは、たとえば自分自身の欲望や快樂がかなえ

九 信仰の確信

られたいと願う祈りであり、みこころにかなう祈りとは、その祈りを通して主のご栄光が現わされるような祈りであります。イエス様は、私たちの祈りを通してご自身の栄光が現わされるのであれば、必ず答えてくださいます。祈りの答えがただちに与えられようと、与えられなかりと、私たちはただ、みこころにかなう祈りは必ず成就するという確信を持つことができれば幸いです。

六、信仰の完成についての確信

六番目に、信仰の完成についての確信であります。

パウロは、私たちに次のように言っています。

あなたがたのうちの良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです。

(ピリピ人への手紙1章6節)

このようにパウロは、私たちに救いのみわざを始められた方であるイエス様は、私たちを救ってくださっただけでなく、私たちの信仰を完成させてくださることを確信していると言っているのです。パウロはまた、イエス様を信じる人々に対して、

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。

(ピリピ人への手紙1章9〜11節)

と祈っています。パウロの祈りのように、私たちの中に信仰の種を播き、芽を出させてください。自分自身の信仰を育ててください、さらに完成させてください。自分自身の信仰を見ると、とてもそのようなことはできないと思ってしまうですが、イエス様のみことばを唯信頼し、へりくだって主に従いたいと祈り願うならば、私たちに注がれた御霊によって、イエス様をますます深く知る知識や、サタンとイエス様、善と悪をしっかりと見分けることができる識別力を増し加えてください、イエス様によって与えられる義の実に満たしてください、さらにご自身のご栄光を現わしてください。これが信仰の成長ですが、この信仰の成長は、イエス様が私たち信じる者を迎えにふたたび来てくださるときに、主が完成してくださるのです。私たちひとりひとりが自分の信仰は、このよう

九 信仰の確信

にして成長させられ、やがて主の来られるときに完成されるのだ、という希望の確信を持つことができれば幸いです。

七、イエス様はゆだねたものを、守ってくださいださるといふ確信

七番目に、イエス様におゆだねしたものを、イエス様が守ってくださいださるといふ確信であります。

パウロは、テモテに宛てた手紙の中で、

私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださいださることができると確信しているからです。

(テモテへの手紙第二一章12節)

と書いています。パウロがこのように言うことができたのは、「私は自分の信じて来た方をよく知っている。」と言う通り、イエス様を人格的に百パーセント信頼していたからであります。彼はイエス様が自分のために何をしてくださったか、今何をしてくださったかを知っていました。ですから、パウロは主が必ず自分のいのちを、また自分が主に導いた多くの人々のいのちを、サタンの攻撃や誘惑から、ご再臨の日のために守ってください

るといふ確信を持つことができたのです。私たちも、心からイエス様に信頼すれば、このような信仰の確信を持つことができると思ひます。

信仰の確信が与えられる根拠

次に、このような信仰の確信は、何に基づいて生じるのか、ということを考えてみたいと思ひます。

信仰の確信は、人間の感情とか、直感で確かめられるものではありません。どうしてかと言いますと、私たちの感情は非常に動揺するものだからであります。感情は激したり、沈んだり、揺れ動きます。そのような不安定な感情によって、信仰の確信があるか、ないかを確かめようとしても、感情が高揚しているときには、確信があると思つても、次に感情が沈めば、とたんに確信が失われてしまったと思つて、落ち込むことになるのです。したがつて、感情によつては決して揺るがない信仰の確信は得られません。

信仰の確信は、次のものが私たちの霊に与えられることによつて生じます。

一、イエス様の約束

一番目に、神の御子が人となられたイエス様の約束であります。イエス様の約束は、次のようなものです。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

(ヨハネの福音書6章37節)

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

(ヨハネの福音書10章27〜28節)

このイエス様の約束が、私たちの霊に与えられることによって、信仰に確信が生じるのです。

二、イエス様の愛

一番目に、イエス様の愛であります。

私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

(ローマ人への手紙 8 章 35 節)

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

(ローマ人への手紙 8 章 37 節)

私たちキリスト者は、この世にあって多くの患難に会うことが考えられます。しかし、イエス様が、私たちを愛してくださるその大きな強い愛によって、どんな患難にも打ち勝たせてくださる、ということ、私たちは霊によって確信できるのです。

いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によるのです。

(ガラテヤ人への手紙 2 章 20 節)

と言うパウロの言葉も、私たちを愛して下さっているイエス様の愛を、霊で確信しているところから出ている言葉です。このイエス様の愛が、私たちの信仰に確信を生じるのです。

三、イエス様のとりなし

三番目に、イエス様のとりなしであります。

神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただきますのです。

(ローマ人への手紙 8章 33〜34節)

イエス様は、ご自分のいのちによって贖い出してくださいました私たちのために、今でも、これからも、父なる神様との間に立つ唯一の仲介者として、とりなしてくださいます。ですから私たちは平安と希望と喜びをもって、信仰の歩みを進めることができますのです。このイエス様のとりなしが、私たちの信仰に確信を生じるのです。

四、聖霊による保証

四番目に、聖霊による保証であります。

あなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめられたえられるためです。

(エペソ人への手紙1章13〜14節)

神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」とすることはできません。

(コリント人への手紙第一12章3節)

あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。

(ガラテヤ人への手紙4章6節)

私たちが、神様を父と呼び、また御子イエスを主イエス様と呼ぶことができ、そのように御名を呼んで祈るときに、私たちの霊に、平安と、喜びと、希望が与えられるのは、この聖霊の保証によるものであります。そして、この聖霊の保証が、私たちの信仰に確信を生じるのです。

信仰の確信が与えられる時期が、人によって異なる原因

さて、この信仰の確信が与えられる時期は、人によってさまざまに異なります。ある人には、イエス様の救いを信じたそのときから確信が与えられます。またある人は、信仰告白はしたけれども、何年たっても救われたという確信がないと言います。どうして、このような違いが起こるのでしょうか。その原因は何でしょうか。いろいろ考えますと、その人の自我の碎かれ方の大小、程度の差ではないかと思われれます。これは自身の体験からも言えることであります。それから、靈に飢え乾きを感じる程度の差も大きな要因であると思います。しかし、それにも増して大きな差の原因は、その人がイエス様と靈的な出会いをしているかどうかということにあります。言いかえますと、私たちの人格とイエス様の人格の交わりの経験があったかどうかということなのです。

私たちの人間関係を考えればよくわかると思いますが、あの人は信頼できる、あの人は頼れる、というのは、その人の人格と自分の人格との出会いがあって、はじめて言えることではないでしょうか。その人の誠実さ、真面目さなどの人格に接して、はじめてその人を信頼することができるのだと思います。イエス様も同じです。イエス様がどんなに自

分を愛して下さっているかを、御霊によって私たちが知ったときに、いや、それは知るといふレベルではなく、それを越えてイエス様の人格に親しく接したときに、私たちはこの方に自分のすべてをゆだねようという信頼が生じるのです。

さきほど申しましたように、信仰の確信がなくても自分の意志で決心し、今までの不従順を心から悔い改めてイエス様を自分の救い主と心で信じて口で言い表わせば、その人は救われているのです。救われればもちろん天国に行けます。それが神様の約束だからです。けれども、イエス様との個人的出会いのない信仰にとどまるだけでは、まことに悲しいのではありませんか。イエス様に心から信頼できない人の信仰の歩みは、永遠のいのちの確信や天国への確信もなく、いつも揺れ動きます。いつも恐れや不安や思い煩いに悩まされる喜びのない信仰になってしまいます。

そうでなくて、生けるイエス様に出会っていけば、「もう、この方にしっかりとしがみついているならば、安心だ、何も恐れることはないんだ。」という確信をもって、日々天の御国を目指して信仰の歩みが続けることができ、どんなにこの世の波風が自分の回りに立ち騒いでも、平安と喜びを失うことはありません。そういう意味で、私たちはイエス様に出会った信仰、イエス様の人格としっかりと結びついた信仰の歩みをしたいと思えます。また、

九 信仰の確信

それこそイエス様が何よりも望んでおられることではないでしょうか。

もし、まだ自分の信仰に確信が持てないと思われる方は真剣に、「どうかイエス様と人格的な交わりをさせてください。」という祈りをなされば、その祈りは、みこころにかなう祈りですから、イエス様は必ず祈りを聞きとどけられて、その祈りの答えとしてご自分と出会わせてくださり、信仰の確信を与えてくださることを確信致します。

十 神から受ける慰め——父の友人の手紙から——

私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたえられますように。神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。

(コリント人への手紙第二一章3～5節)

今日は、このみことばから、神から受ける慰めとはどういうものかということについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。

父の友人の手紙

最近、ちょうど七年前に八十八歳で天に召された父の物を整理していたときに、妻が一通の古い手紙を見つけて私に手渡してくれました。それは、すでに茶色に変色したノート紙の表と裏にペンで書かれたものでした。その手紙は、今から約八十年前、父が一高に在学中に父親を直腸癌で、母親を交通事故で相次いで失った直後に、父の同級生の平山清さんという友人から送られたものであることがわかりました。なぜ父がこの手紙を一生懸命に持っていたのだろうかという疑問は、読んでみるとたんに解けました。

これから、その手紙の一部をご紹介します。

親愛なる重田君

この度の貴君のご不幸に対し、私はいかにして貴君をお慰めしてよいかわかりません。もし、この不幸事が私の身の上にもふりかかって来たら、私は実にどんなでしょう。そのときの覚悟が出来ていなければいけないかも知れませんが、私には出来ていません。私はそんな事を考えるだに恐ろしい。そのような仮定をするに忍びないからです。そのような私

ですから、ただもう貴君がお気の毒でお気の毒でしかたがないばかりで、さてどうしたらよいのかわかりません。

ただ私は神のご啓示により、貴君および貴君のご弟妹をば、ただ神がその全能なる御力と無限の愛とによって、よきようにして下さるよう祈るのが、私の今としては最善の策なることを知りました。これからは日に三度は必ずそれを神に祈ります。そして神が一刻も早く、それを聞き入れて下さるよう、私の行動をば、ますます神の御心に逆らわぬように致します。そのためには、日々私を悩ますところの劣悪なる、しかも強大なる肉体の欲情に打ち勝ち、また最も困難に感じているところの仇をも憎むことのないように、一層励みます。

実際、その場になったら、私のごとき信仰の薄き者はどうなるか、それはわかりませんが、やはり、かかる際に人に最も強き慰安と新しき希望とを与えるものは、神の愛と正義とに対する信仰と、確固たる来世観に勝るものはないでしょうと思います。人は、物質的境遇、たとえば病むとか、死すとかいう境遇に対しては誰でも絶対服従であり、靈魂のみは独立自由で何者にも束縛されないというようなことを、この頃有名なラッセルという人が言ったそうですが、今のようなときは、全く靈魂について考えるべきだと思います。

私は今、まことに僅少なながら、この冬休みに働いて得たる報酬の残部をもって、本を購うて差し上げたいと思います。まことに貴君のご不幸を慰めるためには、何事でもしたいのです。重田君、重田君、どうか私のごときつまらぬ人間の微志を受けて下さい。

私は貴君の他の宗教に帰依せらるることを知っております。また、他人の信仰を実に尊重すべきであることも知っております。しかるに今、キリスト教の本を差し上げるのは、貴君のお心にも背くことになりますから、私もそれは甚だ心苦しいのです。

けれども、三十年來帰依した仏教からキリスト教に移り転じた森村市左衛門翁の実例もあり、内村先生も「キリスト教は仏教などとは比較にならぬ程尊い。」というようなことをば明言しておられるようですから、貴君のお考えは存じませんが、私としてこの際、最善にして、かつ貴君および私自身に対して最も忠実と思うことを断行します。

重田君、少なくとも私の微志をお汲み取り下さい。

神はわが力、わが高きやぐら、

苦しめる時の近き助けなり。

たとひ地は変わり、山は海原の中に移るとも、

我いかで恐れん。

私は、この平山清さんという方には、一度もお目にかかったことはありません。しかし、この方はじめて主の福音を父に伝えてくださり、この手紙がきっかけとなって、父がイエス・キリストを救い主と信じる信仰に導かれるようになっただけでなく、ひいてはずつと後になって、やがて息子である私や、さらに妻や、娘や、母や、ふたりの叔父にも主の恵みが及ぶにまで至ったこと、またこれからも、さらに豊かにこの祝福が肉親のひとりひとりに及ぶであろうことに思いが及んだとき、この一通の手紙を通して神のなされたみわざの深さに心を打たれ、感謝の気持ちで一杯になりました。

なぜこの手紙に父の心が揺り動かされたかということは、私にはよくわかりません。それは、親友であり、かつ何よりもキリスト者である平山さんの、父に対する真心が、誠意が、愛が、手紙の行間に溢れているからであります。悲しんでいる父に対して、今、自分がほんとうの慰めを与えられるのは、自分ではなくイエス・キリストの愛を伝えることであると決断して、心からの愛と、深い同情心と、へりくだりの態度とをもって、祈りつつ、福音を伝えている、その思いが読む者にはっきりと伝わって来る手紙だからであります。

まことの慰めは主から来る

私たちキリスト者は、悩み、苦しみ、悲しみの中に置かれている方に対して、人間的な慰めは何の助けにもならないこと、そしてほんとうの慰めは、私たち人間を愛して下さっている、生けるまことの神だけが与えてくださるものであることを、自分の体験を通して知っています。ですから、私たちは、悲しみ、悩み、苦しんでいる方には、その神からのまことの慰めが与えられるように祈るのです。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。

(コリント人への手紙第二一章4〜5節)

私たち人間を愛して下さる神は、嘆き悲しむ者に対して、

わたし、このわたしが、あなたがたを慰める。

(イザヤ書51章12節)

母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰め、エルサレムであなたがたは慰められる。

(イザヤ書66章13節)

と約束しておられます。

そして神は、私たちに對する慰めを、具体的に神の御子イエス・キリストをこの世に遣わすことによって明らかにしてくださいました。主イエスは、預言者イザヤの口を通して次のようにおっしゃっています。

神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良
い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕われ人
には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告
げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、
悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるため
である。

(イザヤ書61章1〜3節)

平山さんも、キリスト者としてこの確信をお持ちになっていたがゆえに、父に對して謙

虚ながらも毅然とした態度で、このような際に、人に最も強い慰めと新しい希望とを与え
るものは、神の愛と義とに対する信仰であり、死後の行く先についての確信であって、こ
のことは全く靈的に考えるべきであると父に助言してくださったのだと思います。

キリスト者は神の愛、神の慰めを運ぶ器

私たちキリスト者は、自分の罪の身代わりとして、神が御子イエス・キリストを十字架
に架けてくださったことを通して、神の大きな深い愛を知りました。この神の愛は、イエ
ス・キリストを通して私たちに注がれたように、信じる私たちを通して他の人に注がれる
のであります。その意味で、キリスト者は主の愛を、主の慰めを運ぶ器であります。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてく
ださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したの
ではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子
を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私
たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

(ヨハネの手紙第一 4章9〜11節)

もし私たちが、私たちに永遠のいのちを得させてくださるために、十字架の死という尊い贖いの代価を払ってくださったほどの神の愛、主イエスの愛を心から感謝しているのであれば、その愛を自分だけに留めて置くのではなく、自ずと私たちに注がれている、この溢れるばかりの主の愛と慰めを、自分の身近にいる悲しんでいる人、苦しんでいる人に持ち運ぶ器としての使命を示され、実行するようになるのではないでしょうか。そして私たちがこの主の愛と慰めに満たされて、相手を愛し慰めるときに、はじめて相手は心を開いて、私たちの語る真理のことば、すなわち福音に耳を傾けるのではないのでしょうか。

それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。

(コロサイ人への手紙3章12節)

このみことばにある、深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容は、人間の生来の性質にはありません。これらは御子イエスのご性質であります。私たちが神の愛とあわれみを受け、イエス・キリストを信じる信仰によって、神の子どもとして生まれ代わったときに、私たちの中には御霊が宿ってくださいます。そして、神の子どもとされた私たちが御霊に従って歩むときに、はじめてこの御子の性質が御霊の実として私たちに与えられるのでありま

す。御霊の実とはどんなものでしょうか。

御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

(ガラテヤ人への手紙5章22〜23節)

ですから、私たちが御霊の実であるこれらの性質を身に着けるためには、主イエスを信じる私たちの中に宿ってくださっている御霊に従い、肉の思いを排除するように、真剣に祈り求めることが大切であります。パウロは次のように言っています。

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

(ガラテヤ人への手紙5章16〜17節)

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。

(ガラテヤ人への手紙5章24〜25章)

平山さんも、御霊に導かれてこの手紙を書かれたのであろうと思います。手紙の中で、平山さんは繰り返し何度も、重田君、重田君と父に呼びかけておられます。これによっても、私は父の痛み、悲しみを思いやる平山さんの、主イエスにある深い愛と、同情心と、誠意とを感じ取ることができました。まさにこれは御霊の実に溢れた手紙ではないでしょうか。

悲しみ、悩み、苦しむ人に対してなすべき最善のこと

悲しみ、悩み、苦しんでいる人に対して、私たちがなすべき最善のことは何であるかと言えば、それは祈ることでありましょう。そして、その祈りは、神がその人の心を聞いて、慰め主、いやし主である御子イエス・キリストとの出会に導いてくださるようになるといって、真剣なとりなしの祈り以外なのではないでしょうか。

平山さんは、父と父の弟妹たちのために、神が無限の愛によって、良きようにしてくださるように、日に三度、神に祈ると誓われました。そしてそれだけではなく、神がその祈りを一刻も早く聞き入れてくださるよう、自分の日々の行ないを、ますます神のみこころに背かぬよう、自分の肉の思いに打ち勝つように、また自分の仇をも憎まぬように励む

とまで神に誓われました。私たちが他人の救いのために、自分を犠牲にして祈る、そのよ
うな祈りを神が喜んで聞き入れてくださらないはずはないのではないのでしょうか。

悲しみ、悩み、苦しむ人に対する最善の贈物

私たちは、悲しんでいる人、苦しんでいる人を慰めるために何を差し上げることが最善
でしょうか。品物でしょうか。お金でしょうか。そのようなものでは、ほんとうの慰めは
得られないことは言うまでもありません。最善の贈物は、神のみことばではないでし
ょうか。

平山さんも、このことを知っておられました。手紙の終わりの所には、文語体の聖書の
詩篇四十六篇からのみことばが書かれていました。新改約聖書には、同じみことばが次の
ように訳されています。

神はわれらの避け所、また力。

苦しむとき、そこにある助け。

それゆえ、われらは恐れない。

たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。

このみことばを選ばれた理由を考えてみますと、逆境の中に置かれた父に、一刻でも早く、唯一にして生けるまことの神、愛と義とあわれみに満ちた神を信じてもらいたい、そしてその神に信頼して、たとえ、どのような災難が身にふりかかっても恐れることのない確信を持って欲しい、という平山さんの祈りが、このみことばに込められているように思いました。

さらに、平山さんは、父を慰めるためになすべき最善のことは何かを考えた結果、冬休みに働いて得た報酬で買った、神のことばである聖書を父にくださったのです。彼は、父が仏教に帰依きえしていることを承知のうえで、また、他人の信仰を尊重すべきであることを承知のうえで、あえて自分としてこの際最善にしてかつ、父に対しても自分に対しても最も忠実と考えたことを断行したと、言っておられます。まさに、平山さんは神のしもべとして、神にも人にも忠実な方であると思います。

ヨブの友人たち

私はこの手紙を読んだときに、ヨブの三人の友人のことが頭に浮かびました。彼らもヨ

ブの悲しみ、苦しみを慰めようと思ってやって来ました。動機は平山さんと同じでありました。しかし彼らの姿勢は、平山さんの姿勢とは根本的に違っていました。彼らはヨブが苦難にあった原因は、ヨブが神に対して罪を犯した結果であることを認めさせようとして、ヨブを慰めるどころか論争してしまつたのです。彼らは主の愛によってヨブを慰めたのではなく、自分を高い所においてヨブを見下ろし、裁いてしまつたのです。しかし、私は自分を顧みて自分はこれまで、果たして平山さんのように深い愛をもって、人を慰めたことがあつたらうか、人に接したことがあつたらうか、むしろヨブの友人のような態度をとつていたのではなかつたのだろうか、この手紙を通して深く自分の愛のなさを示されました。愛のない信仰は、無価値であるとパウロが言っている通りであります。その意味で、この手紙は私にとって、「あなたは神の愛に欠けている。わたしがあなたを愛したように、あなたも隣人を愛しなさい。」という、主からいただいた、かけがえのない大切な諭しの手紙となりました。

■著者略歴■

重田 定義

1927年東京で生まれる

1950年慶応義塾大学医学専門部卒業

1967年慶応義塾大学助教授（医学部・衛生学公衆衛生学）

1974年東海大学教授（医学部・衛生学）

現在東海大学名誉教授 医学博士

著書（福音関係）

『私たちの国籍は天にあります』（やさしい聖書の福音メッセージ集）

『医者に治せない病氣』

『みことばは食べるもの』（福音メッセージ集）

『私たちはキリストに会った』（わかりやすい福音メッセージⅢ）一粒社

『新しい天地と古い天地』（福音メッセージ集）

『何を求めて生きるか』（福音メッセージ集）

本文中の聖句は、日本聖書刊行会「新改訳聖書」から引用しています。

仮の住まいと永遠の住まい 定価300円（本体286円＋税）

1996年6月15日 初版発行

2001年8月20日 第4刷

著 者 重 田 定 義

発 行 者 重 田 定 義

〒167-0033 東京都杉並区清水2-8-12

印刷・製本 新 生 宣 教 団

定価300円（本体286円+税）